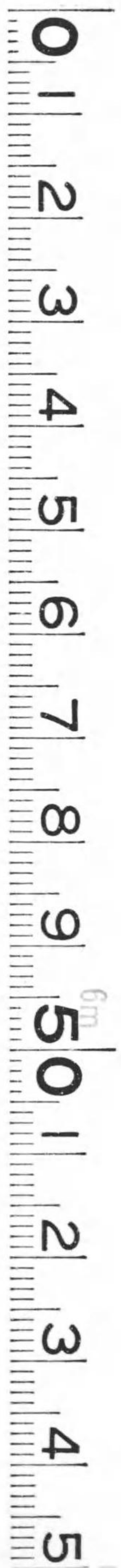
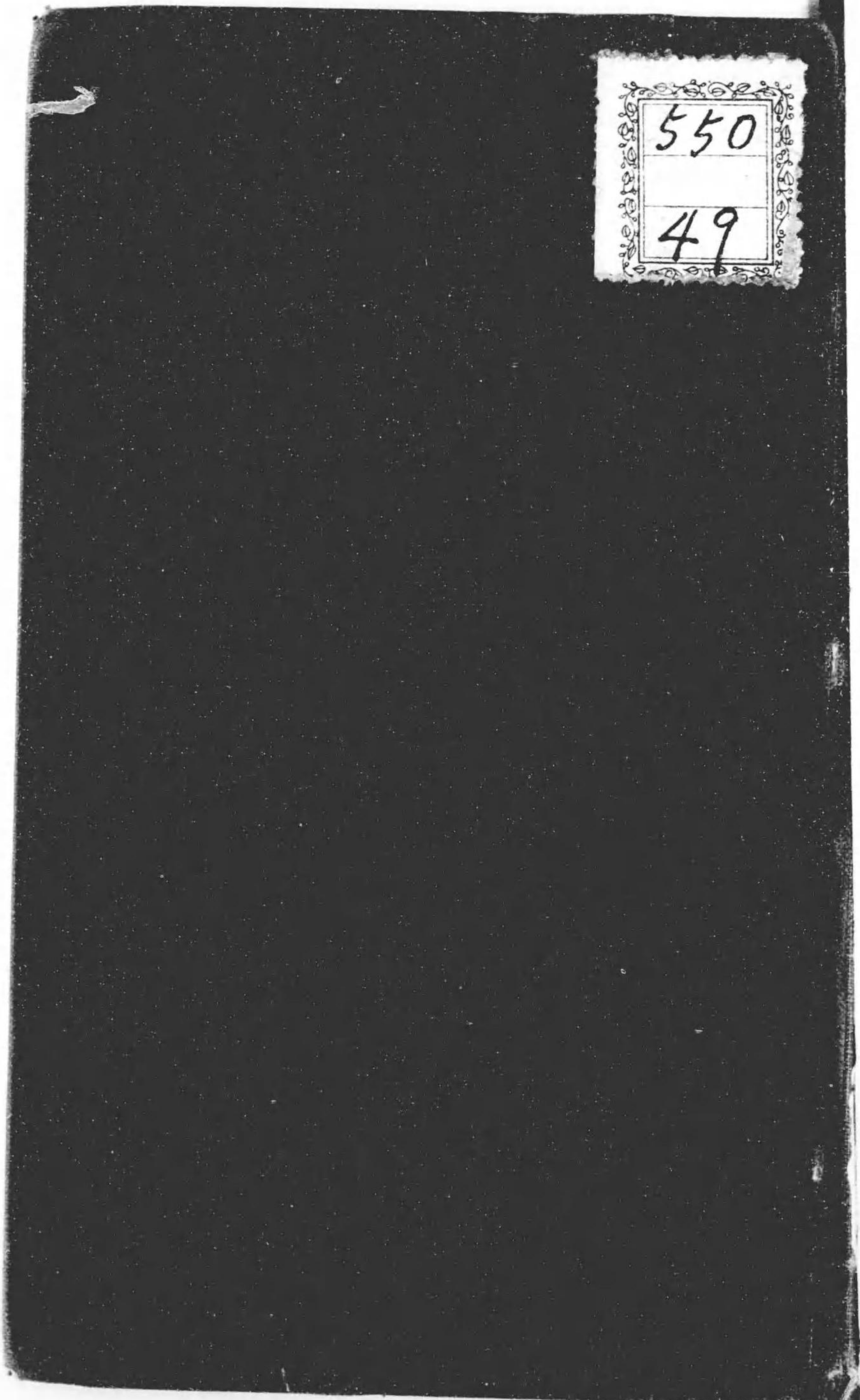


始



550  
49





毒

錦

正  
15. 4. 27  
内交



毒

婦

其一

源平げんぺい以來いらいの天下てんかを丸吞まるのみにして四海しかいの侯伯こうはくを千代田ちよだの城門じやうもんに膝行頓首しつかうとんしゆせしめたる幕府ばくふ三百年さんねんの威勢いせいを、たゞ江戸えど繁昌はんじやうといふ俗語そくごの四字しじに包つんで、何なんの理由りゆうもなく仔細しさいもなく、上下じやうがもろとも夢ゆめうつゝの太平樂たいへいらくに腹鼓はらづみを打うつて、怖おそろしきものは佛法ぶつぽうと鐵砲てつぱうと女房にようぼうの外ほかに現世このよからなる地獄ぢごくの沙汰さたと唄うたひし傳馬町でんまぢやうの牢屋敷らうやしきに、破損はそんの普請ふしんと建増たきましの入い札さつありと言いひ傳たへしかば、なるほど追おへどもく家いへに荒あれ廻まる鼠算ねずみざんの世諺ことわざ、國くにには惡あく人兇狀持にんきやうぢやうもち、かくても滅へらぬ世よの中なかと今更いまさらに驚おどろかれぬ、六親眷族しんけんそくの涙なみだに送り出おく棺桶くわんぼくを作りて人ひとの憂うれひを身みの繁昌はんじやうに千客萬來せんかくばんらいを祈いのる渡世とせもあり、それを喜よろこび迎むかへて北邙ほくばう一片ぺんの煙けむりとすべき火屋墓原ひやはかばらの請負普請うけおひぶしんもあれど、これはま

た眼前に見る地獄の宿の呵責普請、生きながら阿鼻叫喚の囚獄を作る破損建増とは、人の全盛に連れて目出たき出世の第一に用ひらるゝ大工の身として、いかに内々の利分ありとも職業冥利に盡き果つべしと、いづれも流石に身の末を恐れて引受くるものなき折しも、本所龜澤町に親重代の大工棟梁、しかも其道に名を得たる彌兵衛といふもの、真先に馳せ付けて身元の入金もろとも一番札を差入れぬ、

理窟は理窟、利潤は利潤、あの龜澤町の彌兵衛が飛び付いて一番札を差入れし上は、獄裡に苦しむ科人の執念も怨恨も身の末おそろしき大工冥利も彼奴が一人で脊負ひ込んだり、いざや人柱の立った後ぢや犠牲の出た後ぢや、罪も報いも無い金の擱み次第に遠慮すなとて、俄に争ひ競うて札を入れしもの江戸市中より三日の間に四百六十三通となりしかば、係の役人いづれも呆れて眼を見張りぬ、

先例によりて入札は一番より二十五番までと定め、その二十五人を定日に呼び寄せて

一時に開けば、かくても氣持の善からぬ普請と互の心底を見込んで自然に競り上げたる案外の高札、木口で偷むか工手間て盗むか勘定高でしてやるかの差別はあれど、いづれも同じ一筋の慾深どもが最初の尻込思案に似もやらで、今は囚獄の罪人に輪をかけたるほどの強慾なる中に、かの一番札を差入れし龜澤町の彌兵衛が見積高は他人の半分以下、せめて十のものを八か九といへば猶その邊に多少の仔細もあり普請の巧拙もあれど、みすく誰が目にも百兩かゝるべきところを思ひきつて五十兩とし、抛け込んで十兩前後の見當を五兩に切り落したる體、係の役人おもはず眉を擧めながら一應は人札の手前、まづ彌兵衛を落札と定めぬ、

牢屋敷普請係の役人に呼び出されたる龜澤町の大工彌兵衛は今年五十三、花は昔の梅干阿爺といふほどにはあらねど、もはや兩の鬢に霜降る心も秋の暮に名残の額際を照

らして、左右の腕首まで雄龍雌龍の黒雲舞ひ下りたる自慢の文身も、今は浮世の年甲斐に袖を長くして押隠しつゝ、普請の細目に見積書と繪圖面とを持ち添へて罷り出でぬ、

「これ彌兵衛、今度の牢屋敷御普請に就いて江戸中の大工どもが、いづれも異な事を氣に致して進まぬ中に其方たゞ一人第一番に駈け付けて入札せし段いかにも神妙に存するぞ、しかし落札の表を見れば他の者が見積高よりも半分以下とは餘りの相違ぢや、もし御目録の仕様書を寫し誤つたのでは無いか、但し算盤珠を弾き損ねて桁を取違へたのでは無いか、外々の普請とは違つて大切の御政事向に係はるべき天下の罪人を容るゝ牢屋敷の事、萬が一にも手拔など致すやうの義あつては後日に我等が無調法、とりわけ其方が越度となつて輕からぬ事ぢやぞ、今度の第一番に馳せ参じた志に免じて、今のうちならば我等内分に含み置く間、逃札は今ぢや、次の二番

高に落しては如何ぢや」

眉を擧め言葉をや和らけて諭すが如き二人の役人を、彌兵衛おそるゝ額越に見上げて思はず膝を進めながら、

「數ならぬ彌兵衛めを思召して有難き仰せ、また格別に御心添を下さります段々、恐れ入りますれど、親重代の大工を家業と致して今年五十三歳まで人並に世間を渡りましたるもの、その道にかけて御目録の仕様書を見違へまする筈もなく、また手前算勘の積り損ひも仕りませぬ、まして上の御普請に對し手拔落などとは以ての外、全く落しましたる札の表高にて屹度御用相勤めまする間、何卒落札通り此彌兵衛に仰せ付けられたく、もし御疑念も御坐りませうならば身元金を三倍五倍に致し、御普請中に不埒の義を御見當り次第その場に於て御取上げ遊ばさるゝとも、また御普請成就の上にて無調法の義も御坐りますれば、憚りながら上を欺く大罪人として御

存分の御科に仰付けらるゝとも、夢さ決して厭ひませぬ心底」

「いや、落札の其方、今更ら誰彼といふべき場合では無いが、他の者どもに較べて餘り案外の下直に聊か不審いたしたばかりぢや、しかし現在の其方がそれほどまでに申すからは、いかさま世間普通の大工どもが従來の強慾に引替へ、なるほど眞實正直の功者に見積つたものであらう、さらば彌兵衛、しかと申し付けたぞ、くれなくも念を入れて萬事に疎略ないやう致せ、首尾よく御普請の濟んだ上は、我等また申し上げて御褒美を下さるゝやう取計うて遣はずぞ」

「重ね々有難く存じまする、御目録の仕様書に照らして寸分の相違いたしませぬは勿論のこと、お定めの日限中に假令火の雨が降りませうとも、この彌兵衛が九死一生の大病に取付かれませうとも、決して見苦しく日延の追ひ願ひなどは仕りませぬ覺悟」

「いよく男、大工風情には惜しいものぢや」

「いや、その御言葉は、恐れながら御普請成就の曉に戴きたう御坐ります」

多年出入場の受持普請は格別、いざ競うて入札となれば、これまで何處の札にも落した事のない彌兵衛めが、しかも氣持の悪い牢屋敷へ一番に飛び付いたのみか、今度に限りて我等より半分以下の見積りとは不審千萬、たとひ入るだけの材木を無價で貰うても工手間に足らぬ案外の下直、あの落札高で目録通りの普請が何としてなるものぞ、役人の袖の下を潜るか素人目の届かぬ片隅を抜くか、人は外見によらぬ内證の苦しまぎれに一時の金を呑み込む手段か、いづれにしても曲物、この三事のうちの一事は逆も外れまいとて、取残されし二十四人の大工どもが息を殺し、眼を見張つて見物せしに、三十五日間と定められし日限までも無く、晝夜を急いで二十七日間に仕上げたる

破損の修繕と建増の内外とを見れば、さても不思議や天晴れ美事の成就、それなく係りの役人も立合うて目録に引き合せ、普請奉行の見分も美事の言葉に濟んで、何處に一點こゝといふ鏝の打ち込む隙間も無ければ、今まで片唾を呑んで心に冷笑ひし二十四人おもはず舌を巻いて驚きながら、なほ不審の眉は晴れずして頻りに小首を傾け合ひぬ、

言ひ渡されし口限に八日を早めて成就せしのみか、差出されし目録仕様書に照らして更に何の越度もなく、いちく存外の念を入れて端々に至るまで心を用ひ氣を配りたる體、古今未曾有の大工ぞとて、かゝりの役人申し合せ奉行よりも褒美の品を下されんとする時、彌兵衛うやくしく辭退を申し上げて後、あらためて願ひ上げたき一義ありといふ、

さらば呼び出せとて、初めに案外下直の不審を打ちし役人、對座して問へば、彌兵衛いよく身を縮めながら謹んで申し上げぬ、

「今回、仰せ付けられましたる御普請の義、なるほど聊かの相違は御坐りますれど他二十四人の大工どもが見積高は全くの世間普通、この彌兵衛の落札高は最初より半分以上の損耗を覺悟の前にて、わざと御請負申し上げましたる次第、かつまた有難き御褒美まで御辭退申し上げましたの御願ひは、何卒、舊例として、この彌兵衛めに牢屋敷の科人一人を下さりまするやう、偏に願ひ奉ります、滞りなく牢屋敷普請の大工には死罪の外の科人一人を賜はりまするとの事、これは御役人様方より公然に仰せ出さるゝ義では無くとも、その大工が歎願に依って御聞き届け遊ばさるゝといふ、その御舊例を唯一事の心願に存じまして、その口を働かねば其日を喰へぬ下種の大工風情が、みすく身代の半分を抛け出して首尾よく御用を勤めましたる義に御坐りまする」



「なるほど、他の者どもより半分以下にて落札を取った仔細、始めて相分つた、ついで科人一人を下さる、舊例、上より許すべき事では無いが、其方の歎願に依つては随分、遣はすまいものでも無い、じたい何者ぢや」

「恐れながら、梅と申しまして今年十五歳の女子一人、元來この彌兵衛が親戚でも無く由縁でも御坐りませぬが、その梅の父なるものに十八年以前、一時の恩を蒙りましたる拙者、何卒、今度の御褒美に代へて願ひ上げまする」

「いや近來に凡例のない神妙な願ひぢや、取調べた上、差支なくば確に下さるぞ」

「はッ、ありがたく存じ奉ります、ついでながら申し上げますが、その梅なるもの幼少にて父母を失ひ、どこに頼る方もない苦しまぎれ、ある家に縁付き居ります一人の伯母を尋ねてまゐりしところ、その伯母が思ひの外の邪慳にて果は怨恨の餘り唯一筋に突き詰めての無分別、小柄にて其伯母に少々の淺傷を負はせましたる科

に依り、去年の春より牢舎を仰せ付けられしとの事、かつ又その伯母も現在無事に疵の痕も御坐りませぬ、根が年端もまゐらず前後も辨へぬ一時の出来心、さる深い仔細あつて大膽不敵の振舞でも御坐りませぬば、何卒、格別の御詮議を以て」

「や、それほどの科人ならば、さして事の面倒もあるまい、わけて今回の其方が働きに免じ、三日の中に取調べて遣はすぞ」

「恐れながら、くれぐれも願ひ上げまする」

「さて今時には珍らしい男ぢや、たとひ少々むづかしくとも、その心底に免じ、我等また何とか致して遣はさう」

## 其二

土一升に金一升、織るが如く摺れ違ふ往來の袖袂に其日々々の損徳千兩の火が出ると

いふ江戸の繁昌も、さすがに冬の夜は更け行くまゝの霜も置くらん人影淋しく、まして川一重を隔てし本所の場末は筑波おろしの肌寒く、犬の遠吠かすかに聞ゆる亀澤町の大地いよく凍りて辻の番屋の火の氣も薄き頃、兩國の河岸傳ひに二挺の駕を急がせて歸り來りし大工の彌兵衛、自己まづ我家の門戸を叩きながら、はや心得て引開くる女房に何をか私語きつゝ、あとの一挺より手を取って引き出せしは十五六の娘、棒先の小田原提灯に姿は朦朧なれど、眞白の顔ちらと見えて時ならぬ闇の夜の花一輪、どこから散つて來たかと駕人足に疑はれぬ、良人に連れ添ふ女房質氣、定め賃錢に酒料を添へて、俄に喜ぶ聲を閉て切る戸外に聞き流しつゝ、この夜深に近處合壁を憚りてや、音もなく用意の小料理そつと奥の二階の一室に運び出せば、主人の彌兵衛おもはず振り返りて片頬の微笑を浮かべながら、「おい嚟ア、この嬢様だ、正午前お連れ申して來る事も出來たのだが、隣家近所の手

前、わざと斯う夜が更けてからの事にしたのさ、何は儲置き、去年の春から長の間御窮屈で、大分お疲勞が見える様子だ、ゆるく委細は改めての事、今夜ア兎も角、まづ御挨拶だけして置くが宜い、え、嬢様、此女が嚟アで御坐います、なアに貴嬢、根は互の放蕩から尻を放り合つた氣樂蜻蛉の夫婦で、心も輕けりやア身代も輕い貧乏世帯の差向ひですから、萬事御遠慮なく、いはゞ御自分の宅と思召して當分のうちは何よりも身の御養生が大切で御坐いますよ」

いひつゝ、引き合されしは四十三四の世話女房、作らねど自然の垢脱くつきりと江戸生

育に伊達めいて、いづれ昔は尋常の堅氣であるまじき風情、まして年來の家業柄、浮世慣れたるまゝの氣輕に小膝を進めて、

「かねぐお噂は承りましたが、お目にかゝるは今がお初、ほゝゝゝなるほどおやつれ遊ばしたやうでも玉は玉、凄いほどの御容貌で在らつしやる事ね、嚟まア

長の間お淋しう御不自由で御坐いましたらう、その代り當分は思ふ存分お氣まゝを遊ばせ、何分かやうな職業柄で萬事不行届の事ばかり、お氣には召しますまいが、ね工良人、互に隔意なく打解けてさへ下りやア、どうか斯うか及ばずながら、お世話、今日も貴嬢、お迎ひに行くと申しますから、五六日前に仕立て、置きました御着替を出したところが、畜生め何故こんな見苦しいものを拵へたと、さんぐく叱られました、ほゝゝゝ、しかし下から上まで新しい物でさへありやア宜いと心得まして、たゞほんの一時の間に合せですもの、これからは何とか致しますから、ね工貴嬢、今日のところは御辛抱下さいませよ」

「え、餘計な事をいふな、しかしお嬢様、お心だけは丈夫に持つて下さい、お世話といふほどの事は逆も出来すまいが、まづ及ぶだけの扶助、お力になる決心ですから」

神か佛か、うつゝか夢か、思ひもよらぬ助けの綱に曳き出されて、現世からなる地獄の底より浮び出でたる不思議の身、まして今こゝに其夫婦が現在我子の如く、父にも母にも増して一方ならぬ厚き慈悲に、我を忘れて溢るゝ涙を袖に押拭ひながら、しづかに両手をついて言葉さへ力なげに聲細く、

「何と申して宜いやら、心では胸に一ぱい、口では只今お禮の言ひやうも、御存じの通り兩親は無し、これが全く生命の親と有難う存じます、なほ此上とも御見捨なくたとひ下女働きを致しましたも、今日の御恩ばかりは」

ことし十五といふ年には増して言葉の筋も深く、身は二年越の牢屋に疲れ果てながら氣は張り切つて更に取亂せる體もなく、やつれし顔貌は哀れに衰へたれど、雪を欺く富士額に黒漆の如き前髪の生え際といひ、元來の色白を長久の日蔭に包みし水際いよいよ立ちて物凄く、このまゝ一月か二月の養生せし曉には飾らねど自然に備はる男

の生命取、いかなる美人になるやらんと、夫婦もろとも今更に見惚れぬ、

むかし其父より受けたる恩義ありとはいへ、今の我身代を傾けて救ひ出せし彌兵衛の眞心、妻も良人の氣に連れて日夜に劬はり慰めつ、夫婦ともく我子の如く介抱せしかば、元來の身に疾病なく加之も萌え出づる若草の芳紀、さながら春に逢うて苔の花の咲くに等しく、やつれ果てたる身の瘦せも次等々々に顔の色さへ自然の艶を含んで、はや一月あまりの後には春風二十四番の千紫萬紅に秀でたる天生の美人、その名の梅といふ色も香も四邊に薫じて、名の畫より脱け出でたるかと疑ふばかりになりぬ、

はなはだ独り居る

一夜、主人の彌兵衛たゞ一人、かのお梅が居室と定めたる奥の二階に上り行きて、持ち運びし茶菓を進めつ、聲を潜めて語り出しぬ、

「いや毎日々々朝夕に見馴れて居りますから、さう目に立って驚きも致しません、一月以前とは丸で別人のやうになりました、この分ぢやア、もはや大丈夫、さして御氣分の悪い事も御坐いますまい、時に嬢様、今夜ア少々この老爺が改まつて御相談を致したい事で伺ひますが、どうか萬事お心まかせに一切わけ隔意なく打明けて承りたう御坐います、それに就き先達は、まだ闇から出たばかりで元來のお身體でも無し、わざと差控へて委しい事も申し上げず、たゞ十八年以前、貴嬢の父御様に恩義を受けた御報恩とのみ、お話し致しましたが、今夜は改めて委細を申し上げますから、第一は御自分のため、よくお聞き遊ばせよ、貴嬢の父御様といふのは元來この本所の割下水で横山新兵衛と音に聞えた御家人中の腕利、あまり其腕が妙なところまで利き過ぎて異な風説も立ち、喧嘩の出入、刃物三昧の後始末、遣る遣らぬの引受所、鬼でも蛇でも引摺んで人の怖がる事といへば地獄の釜の一足飛

びも糸瓜の皮の勢ひで、果は江戸市中に二つ名前の肩書ある奴を子分のやうに引付  
 けての大賭博、それが役向お頭の耳にも這入った曉の破れかぶれに御家人の株も賣  
 り飛ばしてからは、なほさら以ての身持放埒に御親類の交際も絶え果て、お可哀さう  
 に御新造は苦勞の年月かさねて貴嬢を生んだまゝ、産後の二月目に御葬式、その前後  
 この彌兵衛も人に嫌がられるを鼻頭の自慢で押通した男、親譲りの大工家業は十三  
 年前に死んだ兄のお心よしに委して置いて、類は友よぶ自然の世諺、お父様とは格  
 別の懇意で、随分いふに言はれぬ凄じい事も致しましたものさ、中にも十八年以前、  
 拙者が三十五の春、少しの意氣地から深川の源太とて其ころ名を得た八町堀の手先  
 を闇打に討ち殺して、嚴しい詮議に身の置き所も無かつた時お父様が男づくに引受  
 けての後盾、およそ二月ばかりは其まゝ、隠れて居りましたが、何をいふにも相手の  
 役柄で、平生から世間に悪い風聞の立った弱身の此方で、いよく露現、もはや叶

はぬ瀬戸際、しかし生命あつての物種、遁れるだけは遁れて見ようと、忘れもしな  
 い霜月の二十六日、寒空の夜に紛れて拙者は東海道筋、お父様は奥州街道と互に  
 忙しい中の男泣きで分れましたが、一足前に出た此彌兵衛は上方で三年無事に暮し  
 た後、そつと江戸に立歸つて様子を聞けば、まことに何とも以て申譯のない事、つ  
 い一足おくれたお父様は不意の捕方に圍まれなすつたとの事、然し落ちて枯れて  
 も流石はお侍、繩目の恥を斬り抜けて二階へ駆け上るや否、梯子を引いて其まゝ、見  
 事の御切腹を遊ばしたとの風聞、なるほど聞けば年貢の納め時、外にも何か遁れな  
 い仔細があつたとはいふものゝ、眼前の原因は此彌兵衛がための御最後と、人には  
 言はれず心の念佛唱名、俄に發心して魂魄を入れ替へた回向の第一に、せめて忘れ  
 形見の嬢様を育て、御報恩の一事と存じましたが、何分うまれて二月か三月目に見  
 ず知らずの約束で人手へ遣はされた御行方の知れよう筈はなし、十五年以來の朝夕

只こればかりが氣にか、ツて夢にも忘れず暮しました彌兵衛が、一念の届いたと申  
 ませうか、ふとした事から去年の春、その御様子は貴嬢で、かういふ理由あ  
 ツて御入牢と聞いた時の驚愕」

おもはず兩眼を瞬いて顔を反けながら膝を進むれば、ありし昔の父が事を眼前に見る  
 心地して、お梅は猶更ら悲しく聲を忍んで泣き伏す體に、彌兵衛いよく堪らず其脊  
 を撫でつゝ、

「しかし嬢様、何事も過ぎ去つた昔の夢で、自分の身勝手はいふやうですが、どうか  
 今度の一件を御恩報じの萬分一とも思召して、萬事さらりと御免下さいまし、その  
 代り此彌兵衛が目の玉の黒いうちは、あくまで引受けて力の及ぶかぎり御世話を致  
 しませうから、つきましては貴嬢も來年は十六、十五といふのも僅か押詰つた今年  
 の冬一月で、もはや女一人前の年齢におなりなさるんですから、もし此後の身の振

方で、何とか御料簡でも御坐いますなら承りませう」

「その、その横山新兵衛といふ名前だけは、うすく聞いて居りましたが、お父様の  
 事は妾の夢にも知らない時の昔で、たゞ今度かうして、思ひも寄らず世の中へ出ら  
 れるやうになつたのは、神様が佛様かと嬉しう思つて居るばかり、どうか此上とも」  
 「それぢやア、申しますが、お氣に觸つたら御免下さいましよ、つまるところ、大體  
 の天生が、その御容色ですから、萬事が女で埒のあく當世、丸裸で出ても喰つて着  
 るには御不自由もありませんまいが、さて御兩親は無し、たゞ一人の伯母御は去年の  
 春の事で二度と再びお逢ひなさらう筈は無し、こゝが生涯の考へ時で御坐いますよ、  
 よく存じて居りますが貴嬢を産んだ、おッ母様は其ころ本所きつての評判に唄はれ  
 た御容色で、しかも氣立の優しい柔和の方でしたが、何分お父様が今いふ通りの身持  
 で、喰ふものが無けりやア天狗の三盃酸でも酒の下物にせうといふ御氣性、ところ

で先月以來それとなしに氣をつけて伺ひますに、なるほど其間に出來た貴嬢で、御容色は母御にも百倍まして凄いほどの御天生だが、どうやら御氣性は、お父様に似て在らッしやるまいかと思ふ事が御坐いますよ、いくら混み入ッた事情があるにしろ、女が十四の小腕で、現在の伯母を斬るといふなア、随分おそろしい御料簡、しかし今更この彌兵衛が彼是いふ場合でも無し、たゞ此後の行末を、おとなしう、優しう、何處までも女は女らしうね、第一その御容色と其お伶俐さで、危ッ氣のない無事の世の中を柔和一方で通しなすッたら、どんな幸福な御身分になるかも知れませんぜ、こゝを貴嬢よく胸に疊んで、なるほど本所の割下水に聞えた悪黨新兵衛の忘れ形見かと人に指をさゝれないやう願ひます、ね嬢様、わかりましたか、二十年の昔を洗へば互に細くない事ばかり、其お父様と一つ穴の男が今かう佛のやうになッて申し上げるんですから、世間普通なみくの奴が義理一片の諫言と思召しちや

ア生涯の間違ひですよ、實は拙者も此年輩まで子は無し、親類から貰ッて養子にるといふ的もなし、いはゞ廻り合した不思議の御縁だ、お武家の種を大工風情の家へは異なもんですが、水の流れと人の行末、現在かうなッた曉ですもの、もし貴嬢さへ御不足なくば、此ま、娘分にして、ともく御両親の御菩提も懇ろに弔ひたい心底、それともまた、たとひ何でも生れた種は種、お父様の悪名を血筋の武家で雪ぐといふ思召なら、この彌兵衛また別に思慮が御坐います、せめて一二年の間、力の及ぶかぎり女の諸藝一通りを仕込んだ上、お大名へ奥勤めの御奉公をさせましてもよし、どちらなりとも貴嬢のお心次第」

いひつゝ、膝すりよせて差覗けば、まだ乾ぬ涙の隙より聲曇らしながら、

「只今も申しました通り、昔は昔、この御夫婦を生命の親と存じて居りますから」

「なるほど、それでは改めて、この彌兵衛が娘分になッて下さいますか」

「さうして戴けば、御恩の上の御恩で、なほさら有難う存じます、家の事や父どもの事實は皆、妾が東西も知らぬうちのこと」

「いや、よく分りました、その御料簡を聞いた上は、明日から嬢様とも申しませんよ、よろしいか、お梅、お梅と呼びますから、其方でも眞實の親と思つて、互に腹の底から隔意の無いやう、偶には氣儘が募つて暗嘩するくらゐにね」

「かやうな不束女で御坐いますから、さぞ、嘸お氣に召さない事も御坐いませうが、足らぬところは、朝夕お叱り下さいまして」

「は、は、は、は、足らぬ段か、實は親に過ぎた娘さ、しかし世の中の縁といふもなア不思議なものだ、御両親も草葉の陰から、まさか此彌兵衛をお怨みもなさいますまいよ、は、は、は、は、まづ目出たい、めでたいく」

## 其三

本所の七不思議が八不思議となつた、その一不思議は龜澤町に物いふ苔の花、天から降つたか地から湧いたか、あの大王の彌兵衛め、どこから擲んで來居つたやら、かぐや姫を探し當てた竹取の翁でなうて、これは小町娘を掘り出した無價取の阿爺ぢやとて、俄に世間の風聞に上りつゝ、近處の若者どもは氣も心も空に目色を變へての大騒動、年頃の息子を持つ親は猶更ら朝夕出入の用心堅固にして、町内の中央に陥穴でもあるか家尻切でも住んで居るかのやうに恐怖を抱きぬ、

それも其筈の天生お梅、はや十五六の花の魁かけて色も香も深く、おのづから備はる男殺しの本性とて、かりそめの言葉の端にも情らしく、無心の起居にも飽くまで床しけの艶を含んで、持つて生れし自然の愛敬こほる、中に凜とせし額際、つくらぬ眉毛を



りく、掣めて物おもふが如く、いきくと張り切つたる黒目勝の目千兩、撫で下せし地蔵肩、すらりとせし柳腰、何とやら取急いで歩む時の風情、唐人の寢言に蓮歩と吐せし足の運びを、化粧するがの富士の裾野に残んの雪か、戀に忍ばん宵闇の卯の花かといひし横町の洒落隠居まで、杖を力に振り返つての目鏡越、なるほど七十年來か、る美人は夢にも見た事なしとぞ叫びぬ、

さらぬも彌兵衛夫婦は俄に珠玉を抱ける心地して、金は取られても稼げば戻る、家は焼けても建て直す職業柄、うみの子よりも祕藏の娘、これを盗まれては無南三寶の曉ぢや、とかく人の心の浮き立つ春先は用心せい、わけて生暖かい南風の吹く日は猶更ら大切、得て悪い蟲の附きたがるものぢやとて、朝夕に心を用ひ氣を配りつ、顔色が勝れぬと見れば老爺まづ尻ひツからけて醫者へ駈け込み、夕暮の錢湯に行く時は母親が付き添うて四邊を拂ふ自慢顔、さても風聞に上つて半歳たつた、ぬ間に拵へ

の嫁いや持參金の入婿にと相談うけしこと前後二十七軒、江戸の場末の龜澤町に四不斷の花といはれて、わざく用もないに迂路する男の數も日に幾人、果は言ひ難し聞き傳へて一つの名物とぞなりぬ、

一筋に思ひつめたる女の魂、翻れば忽ち色香に包む花の針まして、怖ろしや人は一念の生を引く血筋の世諺、十四の小腕に怨恨を含んで現在の伯母を殺さんとせし不敵さも、なるほど割下水の惡黨新兵衛と唄はれし父の子といへば其筈ながら、知らぬ世間の目よりは描ける如きお梅の風情、天井に荒る、鼠の音を聞いて驚き障子の棧に這ひ渡る蟲を見て飛び退くかと思はる、優しさに、得もいはれぬ愛敬を添へて加之も天生の才氣利發に朝夕の立働、彌兵衛夫婦を眞實の親として我身を忘れたる振舞に、今は孝行娘の名さへ高くなりつ、やれ勿體ない此寒中に玉の腕で井戸端の水汲むとこ

ろを見たぞ、いや今朝は母親との喧嘩、さても不思議と思へば厨下の掃除を妾にさして欲しいとの争ひぢや、あの皺くちやの梅干阿爺が薄穢い向脛に疵をした時は涙ぐんで膏藥の張替に膿血も吸ふばかりの介抱さ、せめて其優しさの百分一も我等に向けてくれ、ば生命も入らぬもの、まして十六といへば石でも木でも男ほしやの萌え立つ芳紀を、あたり名物あのみまの貧乏世帯に燻べるかと思へば、戀も情も通り過ぎて腹が立つ、浮世が嫌ぢや、生きて居る甲斐なし、人間を止めて坊主になりたいと、しきりに氣を揉んで立騒けども本尊さらに浮きたる色を見返りもせず、朝夕たゞ甲斐々々しき襟かけに母の手を助けつゝ、をりくは店頭の木屑鉋屑に塗れて父の彌兵衛に叱らるゝほどの立働、浅草の觀音様に尻を放りかくる奴はありとも、あの娘に向うて眞正面より唾を吐くほどの男はあるまじとぞ囃されぬ、

兩國の橋の上に喧嘩口論の無い日はありとも、このごろの龜澤町に明けても暮れても名物お梅の風聞を立てぬ日は無く、父の命日を忘れて母親の涙を甘茶と思ふ放蕩息子も、お梅が門口の出入を時も違へず覚えて自慢談話の種子とし、生命を繋ぐ大事の節期に商賣の掛金を取外す間拔野郎も、お梅が夕暮の錢湯歸途を辻に待ち受けて一度も見外さぬといふ片思ひの心中男が七八人、いづこも同じ嘘八百の當にもならぬ千兩千三の吐し場所その町内の髮結床に集りて、互に我を忘るゝ魂魄抜殻の五體を持ち寄りつゝ、何は儲置き只これ沙汰に浮かれて餘念もなし、

「おい／＼どうしたもんだ、今更ら色男の詮議立するでもねエが、この鹽ッ辛い世の中を懷手で喰つて通る金箔付の獨身者が、およそ町内に三十人足らずも蠢めいて居ながらよ、あの本尊いつまであのみまで門前の禮拜ばかりして居るのだ、せめて一人か半分、面恥を搔く覺悟で小當りに當つて見る奴がありさうなもんだね、うかう

かすると外の町内の化物に喰ッて仕舞はれるぞ」

「さういふ貴公から、まづ宇治川の先陣して見るが宜い、途中で溺れて仕舞やアそれまでさ、小當りの面恥のと、そんな手ぬるい料簡ぢやア無効だ、一番こゝは大當りの生命がけで渡ッて見るンだね」

「は、、、心底、善くねエ奴等だ、人に瀬踏みをさして置いて、のこく其後から渡らうといふ料簡だな、しかし色事と戦闘は義理人情の入らねエこつた、友達の死骸を踏み越えて敵に組み付く坂東武者もあつたとさ」

「は、、、敵手なしの獨り相撲、かけで坂東武者の武者振ひばかりするよりやア誰でも宜い、一時も早く武者振り付いて埒をあける、あのまゝ宙に浮かして置かれちやア氣が揉めて堪らねエ、同じ腹が立ッても癢に觸ッても、いよく誰の功名手柄と極ツた曉は却ッて天下太平だ、せめて夜など無事に寝られるからね、しかし斯

う見渡したところ、恐らく我こそと一番槍を付けるほどの武者が居ねエ、どれもどれも中途で犬死しさうな御面相だ」

「べらぼう奴、春畫草紙の殿様ぢやアあるめエし、面で出来るなら人形の戀だ、男は赤裸百貫、舌三寸の世辭愛敬と胸八寸の心意氣といふ事を知らねエか、唐變木め、ところが丸裸一匁五分で舌ッ足らずの無愛敬で心意氣が夏の牡丹餅、ふんと御坐ッて居ちやア鼻持がならねエぜ」

ムラバ

「鼻持がならなくッて尻餅でも搗かうか」

「いや尻餅より焼餅が宜からう」  
「その焼餅で思ひ出すでもねエが、取ツちめるなら今のうちに占めて仕舞ふが宜い、いや拵へ取で嫁にくれるの、いや持參金で婿にならうのといふ申込が半歳の間に三四十人もあつたとさ、本尊は兎も角、かうなると親の料簡が危くッて油斷ならねエ、

第一あの通りの孝行もンだらう、もし親が承知で、うんとさへ言やア忽ち往生寂滅、どんな南瓜野郎の自由になるかも知れねエ、いは、此とこ男前より金次第だ、しかし全體あの老爺どうする考へだらう、今ぢやア家業の大王を止して、其日から左團扇で安樂に暮せる身で居ながら、降ッて来る金銀の雨を片ツ端から跳ね付けて平氣の體が不思議だ、もし人の知らねエところに天生の不足でもあッて、錦繡の裏の手織縞、みかけ倒しの不具ぢやアあるめエか」

「なるほど、こいつア全く點の打ちどころだ、出盛りの蚊のやうに只わい／＼軒下で騒ぐ中に、そこへ氣が附いたア流石に見上げたもンだ」

「いや、いづれも方々と四角ばツて乗り出すにも當らねエが、不具か不具で無いかの前、まだ一詮議があるぜ、全體あの娘を何者だと思ふ、彌兵衛夫婦は子のねエ事は今更ら初まつた譯ぢやアなし、どうせ、どツかで貰ッて來たんだらうが、もしこ

の江戸の親類なら、いくら何でも盆と正月ぐらるにやア互に往來もするから、今まで近所隣家で見知らない筈が無しき、また遠い田舎の身のものといひたいが、偕あの娘どこに土氣がある、いかな見倒し屋の古金買にかけても田舎育ちたアいふめエ、しかも七歳か八歳の小女郎なら、また南風の飴細工で南瓜が胡瓜に化けないとも限らねエが、まるで降ッたか湧いたか突然に出た本尊佛、そいつが中肉中背すらりと揃ッて三十二相を通り越した十六の娘たア神武以來の珍事だ、しかし迷子になる年ぢやアなし、誘拐された様子も無し、ほかりと不意に現はれて其日から親子の間が世間の手本にあるほどの睦まじさ、どう考へても分らねエ、いくら腕を組ンで探ッて見ても腑に落ちねエ事ばかりだ」

「なるほど、さう聞きやアいよく怪しい、よし不具でなくともさ、素性の知れねエ女は暗闇で御馳走を喰ふやうなもンだ、かうなると結句あの生辨天だけに猶更ら却

ツて薄氣味が悪い」

「さうだ、草叢に埋れても珠玉は珠玉で、あれほどの娘だもの、もし片田舎なら別しての事、江戸市中どこの隅に隠れて居たツて人目に附かねエ道理なしだ、してみると、おい、おい、高い聲ぢやアいはれねエが、もし人間外の産物でなからうかね」

「人間外の産物たア何だ」

「穢多よ、穢多の事さ、穢多にやア却ツて驚くほどの美人があるもんだぜ、とかく世の中は自由ならずで、お大名の化姫様に大家の獅子ッ鼻嬢さんといふ事があるからさ」

「こいつア際どいところを突いたもんだ、なるほど穢多かも知れねエ、さうでなくツて全體、あんな娘が不意に掘り出せるもンかね」

「いや穢多でも非人でも宜いから、せめて一度のお情にあづかりたい、どうせ此まゝ無事に居たツて眞人間の名譽物にやア覺束ないからねエ、は、は、は、」

穢多だ、穢多に違へねエの中央で今更ら呆れの宙返りだと、我を忘れて思はず喚き合ふ折しも、店頭の油障子がらりと引開けて現はれ出でしは今いふ噂の本尊お梅、片手に反故もて包める剃刀を持ちながら、

「どうか、これをね、いつでも宜しう御坐いますから、お手隙の時に磨いで置いて下さいまし、そのうち、いたゞきに上りますから」

いひつゝ、剃刀を渡して溢るゝ愛敬に會釋しながら、そのまゝ立出づるかと思へば、そよと吹く春風に花の回るが如く、音もなう靜に振り返りて、今まで喚き立てたる七人の男が面體いちくじつと見詰めたる顔色、雪より白き面に何とやら薄紅を帯びて張り切つたる目元に柳眉おのづから動きぬ、

「どちらの方々は存じませぬが、只今、穢多だくと仰しやツたのは、誰の事で御坐います、また御深切に餘計な御心配まで下さいまして、不具だの不具で無いのと、いろ／＼のお言葉、もし妾の事ででも御坐いますなら、どうか、お捨て置き下さいますやう、いち／＼お名前は何ひませんが、いづれ親どもと相談いたしました上、あらためて、お禮に参りますから」

まだ世に慣れぬ娘心の口惜涙で泣き出すか、さては恥づかしさに顔うち赤めて遁け出すかと思ひの外、天生もの凄きまで水際だつたる目色を据ゑて、じろ／＼と見詰められたる七人の男、さながら頭上より寒中の氷を浴びし心地して總身ぞつと寒く、いづれも俄に顔色を失ひつゝ、一縮みに縮み上りぬ、年齢にも容色にも似合はぬ怖ろしさに、鬼とも組むべき血氣の大男七人が言句もなく恐れ入つたる體を、じろりと秋波に見遣りて小氣味よしと思ひけん、笑渦の露を殘

して立出でし梅の後姿に、いよ／＼驚き呆れて互に顔を見合せながら、首を締め聲を潜めて目ばかり光らせつゝ、

「おい、どうだ今の權幕は、あれが今年やう／＼十六の處女で御坐い」

「なるほど、いよ／＼尋常女ぢやアねエ、しかし堪らなかつたぜ、いち／＼お名前は存じませんが、いづれ親どもと相談の上あらためて御禮に参ります、と喰ひ付いてやりたいほど愛敬のある顔で、しかも二重瞼の張り切つた黒目勝で睨んだ時の凛々しさ美しさ、凄かつたね、ぶる／＼と思はず胸震ひがして未だに止まねエぜ」

「は、は、は、随分と宜い馬鹿だ、いくら何だつて十六の小女郎に眞向から一本まるられて嬉しがる奴があるものか、それほど喰ひ付きたかア何故あの時に飛び付かねえんだ、意氣地のねエ」

「さういふ貴公が何故また黙つて居たんだい、豆鐵砲を喰つた鳩のやうに目ばかりバ

チくさしてよ」

「さ、そこが平生の友達甲斐だ、七人もある中で乃公ばかり出て言葉を交しちやア、あとの嫉妬が面倒だ、實ア皆に遠慮して居たのさ、あんな事なら委細かまはず手でも握ッてやるんだッたに、惜しい事をしたよ」

「しかし、あの勢ひぢやア親爺と相談した上で禮に来るかも知れねエぜ、もし全く穢多でも無からうもんなら大變だ、おまけに不具だと言ひ出したなア誰だ、嫁に遣るか婿を取るか女の生涯が取極める大事の前の娘に疵を付けて済むかと捻ぢ込で來たら何うする、あの彌兵衛も今でこそ眞面目な老爺だが、聞きやア随分その昔は太く荒れ廻ッた男だよ、兩の腕ッ首に食み出してる文身を見ろ、こいつア無事に治らねエぜ」

「さアいよく珍事出來、親子とも揃ッた一癖ものだ、わるくすると火の手が強く持

ち上るかも知れねエ」

「どうしたもんだらう」

「仕方がねエ、この七人で何か物を持って、謝罪に行くのさ」

「口は災禍の原因、いやはや、とんでもねエ事になつて來た、もし聞かねエ時は、あの娘が嫁入か婿を取る夜この七人が御祝儀を奉ッた上、その荷物擔ぎにでもなつて謝ると言ひ込むのさ、しかし考へると馬鹿々々しくツて堪らねエなア、あの生辨天が生れて始めての嬉しい恥づかしい事をする夜、指を咬へて其お荷物の人足になるのか、まるで美しい女を乗せて歩く牡馬だ、氣が揉めて一夜に瘦せるぜ、どうか脛腰達者で生きて居たくねエもんだ、はゝゝゝゝ」

其四

龜澤町に親重代の大工とはいひながら、今の彌兵衛が昔は浮世の裏道を駈け廻つたる  
 鐵火の果、さりとて氣を替へ心を改めし折しも、兄が死跡を嗣いで中年よりの請取身  
 代、しかも千兩前後の牢屋敷には半分以上の損を承知で引受けしかば、底を叩きし内  
 證の苦しさに稼げどもく寄る年波の腕も業も次第に弱りて思ふまゝならず、さりと  
 て今更ら青い奴等の風下に白髪まじりの禿頭を振り廻して働かれもせず、やうく縁  
 日露店の注文を請込んで安物の箱火鉢やら煙草盆やら、俄世帯の荒道具を其日々々の  
 手間賃に暮せしが、ことし五十五の曉、ふとせし風の心地と思ひの外の大熱を病うて  
 心ばかりは生れつゝの岩疊ながら叶はぬ老の骨節まづ弱りつゝ、昔おもへば男山き  
 て見よかしと誇りし餘波の文身まで色もなく褪め果て、重き枕に就きぬ、  
 多年連れ添ふ女房は猶更、わけて娘のお梅は地獄の底より救ひ出されし生命の父なり  
 身を養はるゝ恩義の父なりと、日夜の介抱さらに我身を忘れつゝ、神に祈り佛に念じ

目も泣き膨らして狂ふばかりに歎きしが、あはれ脆きは人の身と草の葉の露雫、十日  
 あまりの後には夢うつゝの如く舌さへ吊り上りて、さぞや言ひ遣したき心の數々も口  
 には得言はず、曉方の鐘の音もろとも竟に空しくなりぬ、  
 たゞさへ底を拂ひし内證に、其日々々を送る主人の醫藥に追はれつゝ、しかも俄の病  
 死に取殘されし母子は身も世もあらぬ心地、やうく物賣り拂うて涙の隙より野邊  
 の葬送をせしが、偕この行末を何とせん、母一人、娘一人、渡る浮世の浪風に力と頼  
 む櫓も楫も失うて、小夜の千鳥の音に泣く思ひ、どこに取付く島もなし、

暮れ行く春の青葉まじりに、ちらほらと残んの花はありながら、還らぬ人の後には母  
 子たゞ二人の涙の外に物もなく、手向の水の初七日も濟むか濟まぬうち、はや其日の  
 朝夕に細き炊煙も立てかねつゝ、やうく四十九日の香華さへ心にまかせぬ夕まぐれ



奥には燈火の影うすく幽に聞ゆる母が念佛の聲、しみんと何とやら身に染む浮世の悲しさに、お梅はそのまゝ目を閉ぢて打ち沈みぬ、  
をりしも門口の戸そつと引き開けながら、中腰になつて家内を窺ふものあり、はや戸外は暮れて奥の燈火うすく届かねば、お梅おもはず振り返りて眉を顰めつゝ、  
「どなた様です、何の御用で」

「母様は在宿かね、横町の伊勢屋からだか、實は母親よりお梅さん、ちよいと此處まで来て貰ひたいね」

横町の伊勢屋といへば本所で一二を争ふ大質屋、かの彌兵衛が牢屋敷の普請を引き受けし時、わが貯蓄の用意だけでは足らぬ損金の百兩を借りしもの、しかし現在この住家を抵當の證文に書き入れしかば、この本人の死後は猶更ら厳しい催促、初七日を過ぎた曉は引き渡せ出て行けと朝夕に急ぎ立てしが、その實は伊勢屋の隠居ことし六

十の阪を越えながら、魚心あれば水心の水性に浮かれてお梅を的の追手搦手、白いか黒いか此奴も尋常の鼠でない店の番頭を使者として、きのふも今日も今宵また、それかと思へば身を切らるゝよりも辛けれど、差迫る今の難儀も原因は我ゆゑ、まして母が涙の回向を妨げじと、お梅そのまゝ走せ出でて會釋しながら、

「何で御坐いますかは存じませんが、母は今あの通り奥の室で、もし妾に分ります事なら」

薄闇に色は見えねど滾るゝ愛敬の香は自然に匂ふ心地して、番頭おもはず四邊を見廻しながら、

「母親に知れないのが却つて幸ひだ、全體こゝの母親も元來は、まんざらの素人でもない癖に固いばかりで物の道理が分らないよ、過目から度々いふ通り、何も今この家を急に明け渡せ出て行けのと居催促するぢやアなし、早い談話がお梅さん、たゞ

一言の挨拶で済むんだもの、なるほど今年やうく十八になつたばかりの娘盛りで、しかも其容貌でさ、六十の阪を上りつめた隠居さん、氣に入る筈は無からうが、さて世の中は自由ならぬものでね、仕方がない、死んだ親父が残した證文を着て寝ると思やア宜いのさ、ね、悪い事は言はないから胸に手を當て、能く考へるが宜い、長いものには巻かれる道理で、立寄らば大樹の下だ、ウンとさへ言やア此家このまま無事に貰つた上、母子二人が安樂に暮せるぢやアないか」

「いえもう、御深切様は、有難う御坐いますが、何分、妾の料簡では、いづれ母とも相談いたしましたして」

「いやその相談が不可ない、相談して居ちやアいつまでも埒の明く筈が無いから、幸ひ斯うして本人に當るさ、母親だつて世間の手前や何かの義理で、口でこそ承知は出来まいが、つまり喰はず着ずには居られまいし、貧に迫つて苦海に沈むもんさへ

あるぢやアないか、肝心の本人さへ得心した上は、まさか叱りもすまいよ、ね、こは早いが勝だ、折角の搖錢樹を取外すと共に家を追ひ立てられて雨露に打たれるよりやア、どうだね、暫時いやな夢を見る氣になつちやア」

「いろくの御深切を、きけば聞くほど、中間に立つた妾が」

「中間に立つた身が辛いといふからは、お梅さん、半分ぐらゐは承知だね」

「外に、思案が御坐いませんもの」

「よし、本人が其處まで分つて居りやア、もう大丈夫だ、明日の朝あらためて母親を説き付けるから、わざと今夜ア此ま、黙つて居るが宜いぜ、しかし感心だ、よく得心してくれたよ、これが全くの親孝行だ、最初には泣くほど嫌な事でも、また後日には笑ふやうなもんでね、は、は、は、」

をりしも奥の回向や濟みけん、お梅くと呼ぶ母が聲に、伊勢屋の番頭そのま、軒傳

ひに立去る影を、うらめしう宵闇の星明りに見送りつ、家内に入れば、母親おもはず眉を擧めて行燈の火口を差向けながら、

「お梅や、今ね和女、誰かと門口で立話をして居たやうだね」

「おツ母さん、實は、あの伊勢屋の番頭さんが、また」

「あ、嫌だ、うるさい事だねエ」

「しかし、あの通り毎日々々責め立てるんですから、今のうち何とかしないと、いつまで此まゝには居られませんもの」

「だつて和女、外に仕様が無いぢやないかね」

「仕様が無いといへば、それまでですが、おツ母さん、どうか妾に二日三日お暇を下さいませんか」

「二日三日の暇を呉れつて和女、どうする心算だえ」

「別に、どうといふ思慮も御坐いませツが、其間おツ母さんさへ知らない顔をして居て下さりやア、きつと妾が此家の證文を取返して御佛壇へ供へるか、また外に母子が身の立つ工夫をするか、何とでも一生懸命に、必ず御心配はかけませんから、後で叱られるやうな事は致しませんから、たゞおツ母さんさへ目を閉ぢて、假令ギンな事があつても驚かないで、黙つて知らない顔さへして戴けば宜いんですもの、もう妾も今年は十八、いくら馬鹿でも小供では御坐いませんし、まさか六十を越して隠居さんの戯弄物になつたり、質屋風情の番頭して居るやうな人の術に乗つて泣きも致しません決心、しかし妾の姿が見えなくなると同時に、あの隠居と番頭さんの處へ往つて、あれまで御深切に仰しやつて下さつた娘めが急に居なくなりまして、かういふ工合に念を押して置いて戴きたいの、さうすれば二日か三日の間に、きつと證文を取返しますから、少しは悪いやうですが、かう差迫つた毎日の難儀で

脊に腹は替へられませんもの、時と場合の成行で」  
 さすがに兩眼の涙は含みながら、描ける如き花の面に何をか思ひ切つたる決心を帯びて、じつと燈火を見詰めたる體、三年越の朝夕を我子として見馴れたれど、うまれし種は種なり、十四の春の事さへ思ひ出せば今更に物凄き心地して、母は俄に驚きたる體、

「お梅、和女、苦しさに餘ッて何か、妙な事でも考へたのぢやアないかね、いくら辛  
 いからッて、をかしな事をしておくれでないよ、折角かうして今まで無事に來たの  
 だから、たとひ明日が日に此家を追ひ出されようとも、また其時は其時の事だよ」  
 「ほ、ほ、ほ、さうまで御心配なさる事では無いんですが、いッそ打ち明けて見ませう  
 か、しかし、もう門口を閉して仕舞ッて、ねエ、おッ母さん」  
 「あ、それでは兎も角も門口を閉して、その、その理由を」

「ゆるく寢てから委しうねエ」

## 其五

兩國の夕暮、岸に臨める家々の火影ちらほらと流る、水に碎けて、中を漕ぎ行く舟の  
 櫓拍子、どこに浮世を忍び駒の三味の音、誰に聞けとや橋の袂を歩みながら、唄ふ小  
 唄の一節、いづれも夜の景色を添ふる江戸の花これかと思ふころ、柳橋の船宿に聞え  
 たる伊豆屋の二階より、そろりと障子を引き明けて立出でつ、漏る、燈火に雪を敷  
 く半面を照らされて何とやら物おもはし氣の風情は彼お梅、ところから名物を集めた  
 る紅粉幾人ありとも更に及ぶ色なし、

お梅が立出でし階下の座敷には、伊勢屋の隠居ことし六十の霜枯阪を見返りながら花  
 に狂ひし春の心、てかくと頭ばかりは光る源氏の君にも劣らぬ體にて、磨けども磨

けども寄る年浪の黒き皺面に入齒の白さ一しほ際だちつ、我を忘れて持てる盃もろとも流る、老の目尻を下けて、おもはず膝を進むる前には番頭太七、こいつも四十の分別盛りを闇雲の無分別に調子づいたる面相、主従互に四邊を憚り聲を潜めて笑を傾けつ、物語りぬ、

「御隠居さん、どうで御坐います太七の腕は、十餘年來お店の結界を城廓として算盤と帳面で討死しさうな筈ですが、お使い道に依つては此上また天下取の御相談にもなりません覺悟、へ、へ、へ、あれほど理由の分らない油斷のならない物固い母親の目の玉を抜いて、まだ一切さらに世間知らずの本尊を此家まで連れ出して来た手際、少々お賞めの言葉を載いても、まさか罰は當るまいかと考へます、第一あの母親が狂氣のやうに驚いて、娘が急に見えなくなりましたと半泣きに泣き込んだ今朝の證據が即ち太七の働きましたところ、しかし御安心遊ばせ、人間きの悪い誘拐では

御坐いませ、ことし十八になる本人が承知で私と計策を示し合せ、一時まづ野暮な母親を出し抜いたので、知れた曉は後のお祭禮、否が應でも、は、は、は、萬事それなりけりになるといふ趣向で御坐います」

「まさか、かう容易く出来まいと思つたが、なるほど太七だ、全く感心したよ、しかし、本人が、よく承知したね、一人の母親を出し抜いてまで」

「そこが手腕で御坐います、魚澤町で評判の小町娘、この廣い江戸中にも無からうといふ玉ですもの、實のところ、最初のうちは母親よりも本人が固くなつて始末に困りましたが、さしせまる貧苦の追手から責め込で親のため孝行の搦手から涙の出るやうな深切ごかしで、いよく組み伏せたのですから、なか／＼一度や二度の駈引ぢやア御坐いませ」

「さうだらう、こいつは店や家内の用と違つて、また別の忠義だから別に骨折代を出

さうよ、は、は、は、時に太七、なるほど今夜あらためて、しみぐくと見ると、見れば見るほど全く晝にも描けないね、おくれた事をいふやうだが、手を付けるなア勿體ないほどだよ、よく今まで他人の手にかゝらないで無事に通つて来たよ、まるで不思議なくらゐるだ、は、は、は、

「これを思ふと世の中は金で御坐いますな、それも金看板かけて色を賣る女なら知らぬこと、清淨無垢の苔の花、あんな美しい處女が貴老、御身代の爪の端で自由になるんですもの、とところで御隠居さん、前以て申し上げて置きますが、外でも御坐いません、親父が死んで四十九日やうく済んだばかりの身で、たよりに思ふ一人の母親を出し抜いてまで斯ういふ始末ですから、あとで母親に叱られた時の申譯がなくツちやア困る、それには幸ひ彼家の書入證文を呉れといふんですが、なるほど、本人の身に取ツちやア辛い理由で、また道理の願ひ、こゝは一番、こツちからも腹

を見せてやらさアなりますまい、第一が後で面倒の起ツた時、母親に文句をいへせない防禦にもなりますから」

「おツと皆までいふにやア及ばない、年は取つても乃公だよ、その位の事は百も承知で、現に今夜ア其證文を持つて來てるさ」

「此奴ア一本まゐりましたな、流石は御隠居さん、これだけの御謀反なさるだけあつて、萬事なか／＼お若く捌けたところ、どうも恐れ入りましたね、は、は、は、」

「は、は、は、ちやア今こゝで、おまへに渡して置かう、かけ込の料理屋で物を喰つたやうに、まさか後勘定といふのも水臭いから」

「同じ事なら、さう遊ばした方が綺麗で御坐いませう、あの通り火の明るいとちやア恥づかしがって居堪らないくらゐですから、私が取次いで、ちよいと別室で猶よく言ひ聞かして、この末長く、お世話になるやう申します」

「さうだ、おい／＼夜も更けるから早く渡してやるが宜い、どこに居るのだ」

「何だが上氣せて困るといひますから、川風にでも吹かれたら宜からうと申して、この二階座敷へ待たして御坐います」

「は、／＼、酒も飲まず、まだ夏といふでも無いに、上氣せて川風に吹かれるところろが千兩だ、いや、そこが生命だよ、は、／＼、／＼、／＼」

今は夢うつ、の隠居おもはず盃を膝に落しながら、懐中より鼻紙入を取出して家屋書入の百兩證文一枚、外に一兩小判五枚これは當座の結納金、いや婿引出かと笑ひながら渡せば、太七そのまゝ請取ツて座を起ちつゝ、媒釣人は宵のうちと戯れて二階へ駆け上れば、お梅なほ障子の外に立ちて柱に身を倚せたる風情、あの梅干阿爺めか今夜これを賞翫するかと、わが主ながらも腹が立ツて思はず總身を躍らしつゝ、そこら二三遍くる／＼と舞ひ歩きぬ、

「お梅さん、お梅さん、どうだね氣分は、少しは善くなつたかね、あまり夜の川風に吹かれ過ぎると却ツて悪いよ、さアその障子を閉めて此方へ這入りなさい、また別に喜ばせる事があるからさ」

「はい、有難う御坐います、おかけさまで、少しは宜いやうな心持も致しますが、まだ何だか、それに今更、こんな事を申しては濟みませんが、さぞ母が心配して居りませうと、氣になツて、氣になツて」

「そりやア無理もないが、もう夜が更けてるから、明日の朝歸ツても同じことだよ、第一、和女が頻りに頼んで居た家屋の證文これ見なさい、この通り先取に貰ツて来たからさ」

「まアいろ／＼と、貴方ばかり御心配をかけまして、その證文とやら、ちよいと見せて下さいな」

「見せるどころか、和女に渡すのだから、はやく障子を閉めて此處へ來るが宜いぢやアないか」

「いえ、も少しの間、このまゝ、どういふもンか障子の中へ這入ると、すぐに顔が熱くなつて上氣せますもの、また其證文も、いづれ貴方の手から母に渡して戴きますから、あとはお預け申しますが、今ちよいと、こゝへ持つて來て見せて下さいましな、それで無けりやア妾は嫌、歸りますよ」

「いやはや、際どいところで無理をいふもンだ、しかし仕方がない、今夜こゝで御機嫌を損ねちやア堪らないから、ちよツ」

舌鼓うちながら障子の外の縁側に立出づれば、お梅なほ欄干に倚りしまゝ、差俯いて物おもふ體、太七そツと其脊を軽く叩いて證文を差出しつゝ、

「さアこの通りだ、ね」

お梅しづかに振り返りて何氣なく手に受取りながら、障子のうちより漏るゝ火影に照らして開きし折しも、さツと吹く川風に南無三寶、ひらくと舞うて闇の流れに散り行きぬ、

「あれツ」

聲もろとも太七おもはず飛び上ツて、

「やあツ、大變だく」

我を忘れて叫びしお梅よりも、太七は猶更の驚愕、はツと欄干に身を乗り出して兩手を差伸ばせども、紙一枚の古證文、夜の川風に吹かれて闇を流るゝ水に落ち行けば、今更馳せ出して追ひもならず拾ひもならず、たゞ怨めしげに漕ぎ行く櫓の音を聞いて、これが白晝の大道ならばと口惜がりぬ、

「もし貴方、どう致しませう」



「だからお梅さん、家内へ這入ッて見なさいと言うたに、とんでもない事をして仕舞  
ツたよ、もし階下の隠居さんに知れると第一この私が濟まないからなア、それにま  
た和女、あとで母親に文句をいはれた時、此奴が取持ちましたと鼻頭へ突き出す證  
據が無いから、ぐうの音も出ないぢやア無いか、しかし、いくら今更ら何と言ッて  
も仕様がな、本人の和女が生證文だから」

「だッて、貴方の渡しやうが悪かつたからですよ」

「渡しやうが悪いか、受取りやうが悪いか、よく考へて見るが宜い、こんな縁側で大  
川端の欄干に憑れて大事の證文を擴げるといふ事があるものか、しかし、ぐづく  
してると夜が更けるばかりだ、階下の隠居さんに悟られないうち、さア早く、お梅  
さん」

「はい」

「はいぢやア無い、早くよ、つまり本人の手に戻れば反故さ、紙屑さ、散ッても焼け  
ても構ないぢやア無いか」

お梅やう／＼心うちとけて合點せし風情、そのまゝ太七に伴はれて障子の内に入りし  
が、ぱつと射す火の光りに今更ら恥づかしとや、しばし顔うち赤めて躊躇ひしを、ま  
た急かれて階下に降り行きつゝ、さしうつむいて一室の内に入れば、伊勢屋の隠居ま  
ちかねて飢ゑたる猿の餌を得し心地、おもはず老の膝乗り出して盃とりあけながら、  
「さア太七、その娘に一杯のましてくれ、そして好きな物でもあれば手を鳴らして注  
文するが宜い、いや、乃公は大分に酔ッて來たよ、はゝゝゝ」  
「つい貴老、早く連れて來ようと思ひましたが、何分この通りの初心で、たゞ恥づか  
しがッてばかり居りますから、實に手数が掛りましたよ」  
「その手数が掛ッてこそ本望だ、もし手数のかゝらない女なら何も、かうまでするに

やア及ばないさ」

「なるほど、御道理でさア、お梅さん遠慮は入らないから、も少しお傍へ寄るが宜い」  
 「は、は、は、は、さう無理に寄せなくツても、まア今のうちは心まかせにして置くが宜い、とかく年のゆかない女は性急に遣ツちやア却ツて呵しくないから、は、は、は、は、」  
 たゞ恥づかしさに身を縮めて蠟燭の火に顔を反けつゝ、今まで無言に差俯いたるお梅、やうく顔を振上げて四邊じろく見廻しながら、

「おや、こゝは何處で御坐いますの、妾とした事が、妙なところへ來ましたのねエ、全體、何しにまるツたのでせう、夢か知らん」

いひつゝ、柳眉を擧めて小首を傾けながら、底の底まで澄み渡るかと思ふばかりの目元に太七を振り返りて、

「たしか貴方は、あの伊勢屋の番頭さんで御坐いましたねエ、しかし、この御老體は

どなた様」

持つて生れし色香は風に艱める花に等しけれど、おそろしや、とても叶はぬ瀬戸際に迫ッては一念ばツと吹き出したる本音、雪の額に天井の節穴を見上げて冷かなる微笑を浮べぬ、

諺にいふ雷に臍を取られし如く、あツと呆れし隠居の面體、たゞ目ばかり見張ツて言句なけれど、太七は堪らず憤怒の膝を進めて拳を握りながら、

「おい、お梅さん、和女どうしたんだ、氣でも違ツたのぢやア無いかね」

「はい、氣が違ツてるかも知れませんから、うかく物を仰しやると、いよく變に分らなくなりますよ、どうか今のうち、歸して下さいましたな」

「な、何だ、氣が違ツてる、歸してくれ、おい、ふざけちやアいけない、いくら證文が無くなツても、かう生證文を目の前に置いての上だ、全體どんな奴が陰で糸を

曳くかア知らないが、をかしう圖に乗ツて妙な事をする、身の爲にならなげ、隠居さんは兎も角、こゝに太七といふ男が附いて居るんだ、時と場合に依ツちやア随分、優しくばかりしねえんだぞ」

「あれ證文の生證文のと、そりやア何の事で御坐います」

「や此女め、おもひの外の喰はせ物、いよく巧んだな」

「おや、何を妾が、巧みましたえ、貴方がたこそ、巧んで人の娘を、こんなところへ引き出したのでせう、六十を越した大家の御隠居と本所で一二を争ふ大質屋の番頭さんとが親父の死跡に母子たゞ二人で其日を過しかねる難儀に附け込んで、ことし十八の娘を手込になさるなら、して御覽なさい、妾が生證文なら貴方がた二人も生證文ですから、このまゝ出るところへ出て白いか黒いかを分けて戴きませうか、それとも伊勢屋の御當主と妾の母とを此家へ呼び寄せて五人一座の談話に致しませ

うか、どちらなりとも御勝手次第」

丹花の唇端かるく噤れども鬢の毛一筋も動かさず、ものしづかに睡れる如き容態すつと起ち上れば、太七おもはず飛び付いて其袖ぐつと掴みぬ、

「やい待て、どこへ往くのだ」

「ほゝゝゝ、今ごろから何處へまゐりますものかね、一人の母が待ツて居りますから亀澤町へ歸りますのさ、そこ放して下さい」

「いやはや驚いた、面にも年にも似合はない太い阿魔だ」

「河岸の材木を見るやうに、太いか細いか存じませんが、あまり無理な事を遊ばすと却ツて、お怪我をなさいますよ」

水際たちて冴え切つたる兩眼、じろりと見返りながら、胸帯の間より逆手に抜き出したる剃刀の光に、さすがの太七あつと驚いて飛び退きぬ、

「ほゝゝゝ、今朝、角の床屋で磨いで貰はうと思つて、つい其まゝ忘れて居た剃刀、それほど怖ろしう御坐いますかえ、外見に寄らない優しい番頭さん、また御隠居さんの猶更お静で在らッしやる事、いづれ其うち改めてお店の方へ伺ひますから、ほほゝゝゝ」

大の男が毛脛を現はし聲荒らけて叫ぶよりも、名筆の畫さへ及ばぬ天生の美顔に冷笑を含んでの物凄さ、すつと眞白き頸首に柳の腰を据ゑて見返りもせず出で行く後姿、はや夜に更けたり、しかも龜澤町へは兩國橋を渡つて人殺しに名高き百本杭の河岸傳ひ、その暗闇の淋しさを現在あの年で唯ひとり歸るかと思へば、なほさら怖ろしき心地して隠居も太七も思はず總身ぞつと寒くなりぬ、

其六

伊勢屋の隠居と番頭もろとも沸き返る腸を絞つて無念の拳を握りしかど、蟲も殺さぬ今年やうく十八の處女に斯くまで呑んで吐き出されしとは家の面目、身の恥辱、世間への外聞、まして其夜の事を思へば苔の花の顔しづかに振り返りて剃刀を逆手に持つたるほどの女、うかくすれば此上いかなる怖ろしき毒に中らんと、百兩の證文ないものにて人知しれず舌を捲きつゝ驚きぬ、

毒

その隠居よりも番頭よりも更に驚きしは現在の母親、眼前の苦しさに追はれて心ならずも娘の言葉に従ひつゝ、二日と限りて遣りは遣りしものゝ、今年やうく十八の女の身に、何の工夫も手段もあるべきぞ、身も汚さず無事に證文を取返すとは親を慰めし一時の方便、かはいや心は泣いて六十の坂越えし人に責め落さるゝ覺悟、さぞ今頃は辛からん悲しからんと枕に涙を流す眞夜中ごろ、門口の戸を叩いて歸り來りしは娘

婦

浪

の聲、はツと驚いて飛び起きつゝ、そのまゝ引き入れては仔細を聞けば、ほゝと笑うて斯うくと語りし始末に、母は思はず身を震はして驚きながら、母子二人が朝夕に責め立てられし百兩の證文、夜風に散りて大川へ流れしといへばそれまでなれど、もの、冥加の怖ろしとて深く娘の行末を戒めぬ、

寢覺よからぬ事とは知りながら、さて人知れず過ぎ去りし事、まして朝夕たえまなく責め立てられし眼前の苦しさも遁れて、其後さらに音なく沙汰なく何の催促なきは、なるほど娘のいふ如く此方ばかりが悪しからぬ證據、彼方にも世間を憚る弱身あればこそと、そのまゝ、無事に過せし五日目の夕暮、お梅は錢湯に出で行きて母親たゞ一人奥の佛壇に燈明あけんとするころ年ごろ三十前後の一癖あるべき男、ぬツと入り來りて家内を見廻しながら、

「大工の彌兵衛さんといふなア、此方ですかね」

ついに見馴れぬ男といひ、伊達給一枚の素肌に横結びの三尺帯、鷲摺みの手拭そのまゝ肩に軽く載せて、五分月代の額に現はす向ふ疵は、いづれ曰くのあるべき面魂、はや會釋もなく腰うちかけし體に、母親おもはず眉を擧めて小氣味わるけに立出でながら、

「どなた様か存じませんが、その彌兵衛は、先々月、歿りました」

「いや、彌兵衛さんの死んだなア承知だが、その家は此家かといふのさ、して娘ツ子は居るかね、噂に聞き及んだお梅さんといふなア」

「はい、只今ちよいと、外へ出て居りませんが、妾が梅の母で御坐います、もし何か御用でも」

「しれた事さ、用がなくツて知らねエ人の家へ來るもんか、實ア少々、南瓜畑に落ち

婦

毒

た風で、乙に搦んだ用を持つて来やしたが、母親ばかりぢやア埒が明かねエ、しばらく待って居やせう、お梅さんの歸るまで、おツ煙草盆でも出してくんな、ついでに茶の一杯ぐらゐ、お雑作にあづかりてエなア、酒なら猶更ら結構だが、はゝゝゝはゝゝゝ」

傍若無人に高笑ひする折しも、門口より歸り来りしお梅、あらたに湯浴せし美人の本體、さらに一入の艶を増して目も覺むるばかりの風情、

「やア、なるほど、此奴ア大變な尤物だ、思つたよりやア百層倍、化物ぢやアねエが聞いたよりも見た方が凄いな、しかし、まだ人の知らねエ凄腕があるといふこと、時にお梅さん、ちとばかり野暮なことッて嫌がられに来やしたのさ、まア其上お化粧でもして、いよく美しい御面相を拜みながら、ゆつくらと話してエもんだ」

母親かくと見るより娘に目をもて招けば、お梅そのまゝ奥に伴はれて、母子二人が何をか頻りに私語きし後、あらためて出で来るを浮世馴れたる母かと思へば、さても世間の娘氣とは倒さごと、ものに怖れて人に恥ぢらふべきお梅、その男の眞正面に坐して會釋しながら、

「母は少々、氣分が悪う御坐いますから何か御用を、妾が」

いひつゝ、茶を汲み出して更に何氣なき體、これほどの曲者こゝに居るかと思ふ顔色もなし、

世間普通ことし十八の娘といへば、この面の向疵を見ても怖れて遁け隠れすべき筈、それを湯歸りの不意に見て更に驚く色も無いのみか、ぐつと胸前を抉るほどの文句ならべても平氣の體、しかも目の色かへて氣遣ふ母親を奥に隠して押へながら、鬼でも蛇でも一切その身に引受けんと、思ひきつて敵の眞正面へ坐したる不敵さには、さす

がの男も聊か案に相違して鋒の鈍りし顔色、

「なるほど、お梅さん随分と宜い度胸だね、いくら何でも高が十八の處女だ、これほどぢやアあるめエと思つたよ、しかし、その太いところを見込んで、こまかくした段取は言はねエ、萬事さつぱりと裏も表も明け放して實ア斯うだ、五日前の夜、柳橋の伊豆屋の二階から散つて落ちた證文一枚、大川の水に流れて仕舞つたと安心しなすつたらうが、ふしぎの御縁で其時に闇の中を漕ぎ行く舟が、わっしの弟分で、あけの朝、大兄こんなものが手に入つたと持つて來やしたから、見りやア龜澤町の大工彌兵衛、宛名が本所で大質の伊勢屋、文句は此家を抵當の書入にした百兩證文まづ大略かういふ次第でね、は、は、は、は、」

流石のお梅も事の意外に驚いて、はつと思ひしまゝ、暫し差俯きしが、やがてまた顔ふりあけて目を見開けば、嵐の後に花の色まして冴えたるが如し、

「おや、さやうで御坐いましたか、しかし、その證文は只今どちらに、宛名の伊勢屋へお戻しなさいましたか、また貴方の御手に御坐いますか、その邊を伺ひました上でお返事の致しやうも」

「こりやア驚いたぞ、いよく天性の本筋だ、いちよくいふ事が根元に當つて枝葉がねエ、なるほど、實ア伊勢屋の番頭に見せた上、其夜の事も委細に聞きやしたが、お梅さん、あんまり酷いぢやアねエか、たゞの素人に聞かしたつて、呆れるばかりで、本當にしねエくらるだよ」

「ほ、は、は、さう承りまして、萬事よく分りましたよ、それでは斯うで御坐いますね、どうせ失つた證文一枚、世間の外聞かたく、此方は諦めてるが、お前さんの手に這入つたのを幸ひに、おもふ存分に痛めてくれと、あの番頭が口惜まぎれの腹で頼んだのでせう」

「や、天眼通だ、いかにも其通り、證文を貰った上は百兩の抵當にした此家を貰ったも同然、その代り伊勢屋の隠居と番頭の名代として、お氣の毒だが少々ばかり、いぢめに來やしたのさ、もしこれが悪黨の看板かけた野郎か手剛い名の通った奴なら、わッしも永代から吾妻橋まで舟乗一切の出入沙汰を引受ける上汐の勘太といふもんだ、一も二もねエ、文句なしに引き摺り出した上、二度と再び歩けねエ目に逢はず筈だが、龜澤町の名物お梅さん今年が十八の處女で、しかも遣られた本人から、かうくと聞いて二度驚愕、逢ッて見て猶更、實ア感心の山を通り越して褒めてエくらるだが、證文の手前、さうもなるめエから、百兩だけの嫌な事をいふのさ、伊勢屋の隠居や番頭に頼まれたなア、お梅さん、恩に着せるぢやアねエが、こんな手ぬるい談判ぢやアねエんだよ」

「それでは、どう致せば宜しう御坐いますの、貴方の思召通り、お指圖をして戴きませう」

「いやに御丁寧な挨拶だね、此方の思召通りお指圖をして戴く柔和な女でも無からうよ、は、は、は、しかし不意に拾った百兩の證文、金で耳を揃へて今すぐに出せの、この家を此ま、明け渡せのと、そんな野暮は言はねエから、時と場合に相應の返答するが宜からうぜ」

「それでは、お氣に召しますまいが、かうして戴きたう御坐います、その證文通り此家を明け渡しますから、どうか貴方の手で此家を賣ッて、あすから母子二人が身の置場もない妾どもへ、そのうちの幾等か、せめて二十兩とか三十兩を下さいますまいか、慾を申せば半金も戴きたいのが眞實のところ、手輕う申せば、落す筈のない證文を風に散らして落した主があればこそ、拾ふ筈のない川中で拾った人もあるといふ道理で、あの山分とやらいふものに願へますまいかねエ、ほ、ほ、ほ、其上また、



お心易くさへして戴けば、いづれ御恩も返しますから、つまりは伊勢屋さんが身代の爪の垢にも足らないほどの御損で、われ々を思ひも寄らぬ半分づつの幸福、ねエ貴方」

いひつゝ、鐵も溶けんばかりの目元に情の色を含んで見遣れば、いつしか魂魄を奪はれて酔へるが如く、しきりに首肯し果は思はず横手を拍ちながら、

「一言もねエ、眞向梨割、青竹を兩断にしたといふなア全く此こつた、聞くばかりでも氣味が好い、いくら褒めても譽め足らねエが、お梅さんこの様子で二十四五にでもなつた曉は、随分おツかねエ女だな、とても野郎は叶はねエ、萬事その面で押すんだもの、は、は、は、は、」

## 其七

江戸の大川、流るゝ隅田川の永代より吾妻橋までの間を通ふ家形舟、猪牙舟、網舟、渡し舟、およそ客の懷中に掉さすものを一切の我子分として、年中の冥加錢いちく上汐の勘太と呼ぶるゝほどの男が、ぐツと握りし百兩の證文、鬼を相手に地獄の底まで鏝一文も取外れのない筈を、お梅が丹花の唇に嚙られて横手を拍ちつゝ、ころりとまゐりしのみか、百兩の家を七十五兩に賣り急ぎながら、わざ／＼半金として五十兩を持ち來りし時、お梅ほゝと笑へど母親おもはず顔色を變へて驚きぬ、さて請取りし五十兩そのまま、再び勘太の手に戻しつゝ、お世話ついでに男と見込んでの御依頼、これを此まゝ喰ひ潰さうよりは、幸ひ兩國の水茶屋に空株あるとのこと、萬事よろしく母子二人が身の立ちますやうにと、おそろしや一度ならず二度ならず責め來る敵を味方にと取つて追ひ使ふお梅の心中、いづれ此まゝ濟まぬ奴に用の切れ目は此方の憂目と思つての業ながら、それとは知らず勘太いよく飛び上つて力瘤を入れ、

水茶屋儲置き火の車の茶屋でも何でも兩國の河岸は我蠅張、皆までいふな委細きくに  
及ばぬ男一疋、たしかに引き受けたと、俄に馳せ廻って日夜に取急ぎつゝ、軒を並べ  
し十二軒を扉に追ひ送りし橋の袂の目貫を空けさせ、さながら先祖代々の本尊佛を迎  
ふるが如くに立騒ぎぬ、

淋しき場末の片蔭に其身を飾らで暮せし時さへ、塵塚の鶴、龜澤町の名物お梅の風聞  
立ちしほどの色香、まして今は江戸随一その兩國に鬼も十八の化粧を凝らして現はれ  
しかば、見るもの萬人いづれも忽ち本性を失うて狂ひつゝ、家も庫も生命も入らぬと  
朝夕に寄せ来る客の人波を、ものゝ数ともせざる天生お梅の働き、いちく引き受け  
て手鞠に取るが如く誰が教へねど言葉は自然に備はる殺し文句、わざとならねど愛敬  
は人の腸を掻き捲るほどの風情、惜しや此まゝ日本一の大廓に抛け込んでも色の世界

の五町まち三界を名を得し傾城も及ぶまじとの取沙汰、いつしか江戸市中に聞えて兩  
國の四季不斷の花と唄はれぬ、

白晝は兩國の水茶屋に一入の色香を粧ひつゝ、男冥利に我こそと寄り来る萬人の戀を  
惱せども夜に入れば人知れぬ罫と定めし横山町の路地裏に歸りて、わづかに膝を容る  
るばかりの一室なれども昨日に變る今日の氣樂さ、母子たゞ二人が手足を伸ばして身  
の疲勞を休めながらの物語り、

「ねエお梅や、世の中は妙なもので何が僥倖になるやら、あの龜澤町で毎日々々伊勢  
屋さんに責められた時は、あすが日にも泣きの涙で乞食になるかと思ツたが、その  
苦しさが基因で、またあの勘太さんに吐鳴り込まれたのが却ツて今日の端緒、これ  
といふも皆和女一人の活動だがね、此上は何卒、もう、あんな危い怖ろしい氣にな

ツておくれでないよ、店を出してから、やうく一月たつか経たない内でさへ、これほど繁昌して氣樂になるンだもの、第一が今までと違ッて、世間へ顔を晒しぬく客商賣だから、もし呵しな事でもあると、ねエ、それも以前のやうに其日が立ち行かないとか、脊に腹は代へられないとかいふ事でもあればだが、ねエお梅」

「あれさ、おツ母さん、妙なことを、何も妾が、さう悪いモンでも無いにねエ」

「いえさ、決して悪いといふンぢやアない、悪いどころか、母のために氣を揉んで、いろく心配した上こ、まで漕ぎ付けてくれたンだもの、全く心中では禮をいうてお佛壇にも自慢してゐるくらだがね、あんまり人が大騒ぎをして店が繁昌しすぎるから、末を案じて餘計な氣苦勞もするのさ、現在あの勘太さんだッて、自分の損得を捨て置いて人の難儀を救ふといふ性質でも無からうぢやア無いか、それが和女、あの通り一生懸命に力瘤を入れて、親身も及ばないほどの世話をしてくれるには、

どうせ心の底に、何か一物あるに違ひないよ、實は斯う俄に店が繁昌して和女が名高くなるに付け、猶更ら心配だよ、いつ何時どんな事を言ひ込まれやアしないかと思ツてねエ」

「ほ、ほ、ほ、それくらゐの事は、おツ母さん、最初から承知で、いつ何時、どんな鐵砲の火蓋を切られたッて少しも驚かないやうに、そツと工夫がしてあるから、まア氣を揉まないで平氣に居なさいよ、兎も角この調子で一年も経てば、おツ母さん一人が生涯安樂に暮せるだけの物は出来ますからねエ」

「なるほど、ねエ、和女のこツたから、眞逆うかく人の術に落ちて困るやうな氣遣ひは無からうがね、全體その工夫といふのは、安心するため、聞かして置いてほしいよ、いくら聞いても役に立たない母だが」

「ナニね、おツ母さん、さう大した理由でも無いの、つまり勘太さんが本音を吹いた時

の喧嘩相手を拵へてあるのさ」

「え、ッ、何とお言ひだ、喧嘩相手を拵へてある、お梅、また和女」

「おツ母さん、また和女と心配さうな、お顔ですがね、こゝは能く聞いて下さいよ、最初から眞實この妾等二人が可哀さうだと思つて、全くの男氣で世話してくれたのなら、また此方も其氣で、どこまでも有難く恩にも着るし、時と場合の成行次第に依つては義理人情の柵にもかゝつて、生涯の依頼にせまいもんでもない筈ですが、肥して置いて喰ほうといふ奴に、をめぐ誰が黙つて喰はれますもんですかね、だから、今の水茶屋を出して四日目、この兩國橋を境に淺草見付から日本橋界隈まで一手に握つてる賣り出しの大男、もとは上州の安中生れで本名は勝藏ですが、俗に上州勝、また鬼勝といふ人の家へ、そつと泣き込んで、實は斯うくと萬事の始末を打ち明けて頼んだところ、あの河童野郎は水の上ばかりで陸の上ぢやア半文の價

値もねエ奴だが近來そろく河岸ツ端から這ひ上るといふ風評だ、假令そんな事になくつても一度は突いてやらうと思つてる折柄、よし引き受けた安心するが宜い、いくら何でも年端のゆかねエ女を茶椀蒸にするたア意地の穢ねエ奴だ、眞正面から戀を仕かけて暴れ込むより太エ奴だ、然し萬事が男づくで通す上州勝が女を中間に置いて文句もいはれぬエから、まア勘太の本音を吹くまでは手を出さぬエ、もし吹ツかけたら直ぐに駈け込め、後盾となつて指を差させぬエのみか、あの水茶屋に乃公が力癩を入れ直して今より百層倍にしてやると、おツ母さん、まア斯ういふ理由でね、ですから安心して下さいよ、また妾だつて、あの勘太さんが妙な奥の手を出しさへしなけりやア、これまで世話になつた恩は恩で忘れない決心、ところで勝といふ人も、鬼勝と呼ばれるくらゐですから、親か兄弟のやうに安心も出来ませんが、まだ兩國の水と陸で名を取つた二人が雙方から睨み合つてくれる間は、兎も角も無

事ですから、ねエ、おツ母さん、もし二人の睨み合ひ持合で不安心なら、毎日々々  
いろんな人が来るンですもの、その中でも、一人生命知らずの武士か何かを引き入  
れて、巴のやうに三方からの掛合で、鼎のやうに三脚を据ゑて、どツちへも轉ばな  
い工夫がありますさ、ほ、ほ、ほ、」

螻蟻は見えねど甘きに集ひ人は叶はねど戀に集まる、軒を並べし兩國の水茶屋十二軒  
あれども、お梅が色香に奪はれて空照る月夜の星に等しく、兩國の全盛たゞ一人で占  
むるかと思ふばかり、けふも朝より立替り入り變りて絶え間なく詰め掛けし容足も、  
はや傾く夕陽に人浪の汐合いつしか去りて、ほつと息つきながら、これさへ浮きたる  
人の心を撈る玉の腕の襷を外せし折しも、湯歸りの伊達姿これ見よがしに入り來りし  
は上汐の勘太、ぬつと我物顔に奥の床几へ腰うちかけて、

「刻の故か一時に込み合つて爪も立たねエやうに騒いだ有象無象が、いつの間にか消  
えて無くなつたのが妙だ、もう日の暮れるに間もあるめエ、さアこれからが御骨休  
めだ、は、は、は、」  
人の世話した後に顔を見せぬは懐かしけれど、これは世話した恩を鼻頭にぶらつかせ  
ての自慢顔、あ、うるさいとは思へども眼前浮世の義理、お梅は一人の愛敬を浮べて、  
さも嬉しげに會釋しなから、

「おかけさまで、日に／＼繁昌いたしましたね、この調子では、とても妾一人で無効  
ですから、どうか外に手傳女でも御坐いましたら、お願い申します、ほ、ほ、ほ、」  
「いや、その邊の事も考へねエぢやアないから、まア萬事この乃公に任して置くが宜  
い、しかし物は足らねエところに味があるのさ、氣轉の利かねエ腐れ阿魔が、十人  
二十人居たツて何の役に立つもんか、やはり此ま、名物は一人で持ち切つてよ、手

の届かねエところア、ちよいくと其目元の愛敬だけで澤山だ、は、は、は、は、しか  
 し多くの中ちやア随分と色の生ツ白い奴もあるから、お梅さん、浮氣を出しちやア  
 いけねエぜ、浅草の観音様も萬人一様に願がけの利かねエで持ったものさ、同じ賽  
 錢で一人に利益があつて見なせエ、とツくに雷門へ蜘蛛の巣が張るよ、は、は、は、  
 をりしも一人また入り来りし伊達男は、五體の急所いづこにあると人に怪しまる、上  
 州勝、年ごろ四十二の大兵に兩眼の光輝ぎろくと泣く兒も止まる威勢、すつと此  
 方の床凡に腰うちかけながら、

「おツ、茶よりも水だよ、大きな器で水を一杯、同じ酔覺の甘露でも此家なアまた格  
 別に美味からうさねエ、は、は、は、は、いつ見ても美しいもんだ」

時も時、はつと思へど、いづれ一度は噛み合すべき二人の勝負、ついでに序幕を見て  
 置かんものと、お梅は更に何氣なき風情、なみくと大湯呑に水を汲んで差出しなが

ら、

「宜い御機嫌で御坐います事ねエ、もし何なら幸ひ今は客も絶えて居ますから、つい  
 其處で貴方お横におなりなさいましな」

「うめエもんだ資本の入らねエ舌の鋒で突いて置いてさ、其上を天生の美貌で殺すん  
 だもの、は、は、は、は、全體どこで修業して来た、年は十八で全くの處女といふこッ  
 たが下ッ腹に毛のねエ四十鳥田の莫連女も及ばないぜ」

「ほ、は、は、お世辭の宜い事を仰しやるよ、此ごろは女の方より殿方の方が油断がな  
 らないといふ噂です」

「は、は、は、油断がならねエと言やア、かう、お梅さん、氣を附けなよ、ちよいと物  
 の比譬が乃至のやうに四十の上を越して、さうざ好きな事をして来た曉ぢやア、もう  
 忌みツたらしい色戀沙汰も薄くなるがね、やうくと此ごろ河岸ツ端へ手をかけて這

ひ上らうといふ野郎なンざア鉞よ、あの鉞といふ奴、上の方へ向ツちやア更に效のねエ弱蟲だが、うぬより下の方へ向ツちやア重量も刃金もあるから無闇に押し切りたがるのさ、だから氣を付けて鉞野郎に押し切られねエ用心するが宜いぜ、とかく駈け出し奴は人の弱味に付け込んだり恩でもねエ一時の恩を鼻にかけて、とんでもねエうるせエ謀反を起すもんだよ、ねエ、は、は、は、は、つまらねエ奴の喰物にならない防禦が肝要だ、いつまで無疵の名物お梅で居なせエよ、まだ其上の慾を言やアこ、は一番、その年齢を美貌で男嫌ひといふ名を賣らしてエもんだ、兩國で名物お梅といはれるのも結構だが、ずばと抜けてさ、江戸で奴のお梅と言はせてエなアあんまり伶俐で美し過ぎるから、親類でも何でもねエが、たゞの女で通すのが惜しいよ」

互に名を知り顔は知れども、水と陸とで言葉を交せし事なければ、上汐の勘太、じろ

じろ見遣りながら、知らぬが佛の唐變木め何を吐しやアがる、今更ら急に遅蒔の種を植ゑて、無効だ、これこ、に乃公が居るぞと冷かなる笑を含んで、しきりに煙草の輪を吹きしが、どうやら此方へ嫉妬の刃を向けて來た様子、やうく此ごろ河岸ツ端に手をかけて這ひ上る野郎に喰はれるなと聞くや否、ぐツと痲癩に徹へて身を捻りつゝ、顔色を變へぬ、

「おい、お梅さん、湯呑の水ぐらゐちやア無効だ、その手桶を頭上から、ぶツかけてやんなよ、よほど熱が出てる様子だ、手桶の水で足らざア武藏一番の大木、この隅田川へでも蹴落してやらうか、は、は、は、は、」

今日に限らねども幸ひ通りがけに彼奴と見て取ツて入りし鬼勝、もとより萬事かくとは覺悟の前、じろりと横目に睨んで片手に腮を撫でながら、

「こ、は陸の上だ河童野郎め、土左衛門の尻の穴ばかり吸ふ分際で、ふざけた事をい





兩人もろとも思ひ切ッて起ち上る勢ひに、かねて覺悟のお梅も今は其まゝ空ふく風ともきかれず、はッと呆れて驚く風情に二人が中間を隔てながら、露を含める花一輪の嵐に揉まれて惱むが如し、

「あれまア、貴方がた、どうか暫く待ッて下さいまし、これがお二人の身の上で男づくに出来た事なら兎も角も、どうやら妾の事から、その上こゝで互に妙な意氣張になりましては、ひよんな事で雙方お名前が出るばかり、時も悪し場所も悪し事の起りも世間の手前、あんまり軽いやうで萬事お氣の毒さま、ねエ、ほゝゝゝ、いッそ水に流して下さいましな」

いひつゝ玉の腕に勘太の胸を押へて慰めし後、そのまゝ身を翻して鬼勝に向ひつゝ目に物いはせて頻りに縋り付けば、

「また幸ひの遁腰と吐さうが、なるほど、さうだ、つまらねエ端た野郎と叩き合ッち

やア却ッて此方の恥辱だ、こゝは一番お梅さんの留め女で乃公から退くとせう、しかし勘太よく聞けよ、これを今日の御縁で乙な山縁を結ンだ以上は、いつかまた赤エ酒でも酌み交すから、なるべく馳走の用意して待ッて居ろ」

「待つにやア及ばねエ、いつ何時でも馳走してやるから遠慮なしに出て来い、煮殺しか叩き膾か生づくりか、魚ア其方のもんで料理は此方の腕だ、組板に乗ッた時、吠面かはくな」

「いやに御念の入ッた野郎だ、もう文句はねエか」

「あッても此家ぢやア無効だ、あらためて出直さう」

「其時、ついでに勘太しやッ面を洗ッて来いよ」

「うぬも鼻アに死水とらして出ろ」

「はゝゝゝどこまでも恍けた奴だ、ぢやア勘太、忘れるな」

「は、は、は、どこまでも間拔けた野郎だ、ぢやア上州勝、忘れるな」  
 さすがに男と男、其ま、更に一言もなく、たゞ雙方よりお梅に對して笑を含みしのみ、  
 いざと等しく腰うちあけて互に立出でつゝ、見返りもせず右と左へ分れ行く後姿を、  
 お梅しづかに見送り見分けて暮れかゝる空を仰ぎながら、獨言、あゝうるさい鴉だこ  
 とねエ、

## 其八

馬の脊を降り分くる夏の夕立、さつと落ち來りて十二軒の水茶屋いづれも一時に込み  
 合ひしが、また晴れ行く空に夕虹に立去りて暫し客の絶えし時、兩國橋を渡る人の足  
 音俄に轟いて、それ喧嘩だ斬つた殺したと立騒ぐ折しも一人の武士が拔身の血刀さけ  
 て隣屋の水茶屋に駈け入りしが、きやつと叫んで女どもの驚く聲に其ま、立出でてお

梅が方に入り來りぬ、

「相對喧嘩では無い、身分あるもの、無禮討だ、暫く休息させい」  
 いひつゝ、奥の床几に腰うちかけて、重ねし懷紙を取出しながら血刀を押拭ひつゝ、鞞  
 にをさめて息をつく體、見れば年ごろ二十三四の水際たつたる美男、今しも人を斬り  
 し血氣の勢ひ、なほ残りて眉毛おのづから逆立ち目尻さへ釣り上りたるまゝ、やうや  
 う指頭二本を入るゝばかりに剃り立てたる大髻の元結きれて肩に亂れ、雨に濡れし黒  
 緞の羽織は引き裂け、茶鴉の袴に飛び散つたる血汐の痕、まだ追ひ來る奴やあると物  
 凄く四邊を見廻しぬ、

平生は廣小路の見世物小屋に出でて天晴れ女相撲の關取に劣るまじき隣屋の茶屋の女  
 どもが、きやつと驚き倒れて泣き叫びしに似もやらで、風にも堪へぬ風情のお梅が更に  
 顔色も變へざるのみか、かゝる時には茶よりも水と大湯香に汲み入れて差出せば、武

士は首肯いて一息に飲み乾しながら、その顔じつと見詰めて小首を傾けつゝ、  
 「よく氣が付いた、こゝは其方一人か、迷惑はかけんぞ、暫く此まゝ」  
 「何事か存じませんが、どうか御ゆるりと遊ばしませ、あれ御召物が」  
 「いや／＼構はずと捨て置け」

「もし、あまり端近で御坐いますから此方に、こちらに衝立の陰が」

「は、／＼、芳志は忝いが、隠れるに及ばん。このまゝで」

はや門口に見物の山、その人浪を掻き分けて一人の中間、木刀片手に飛び込みながら  
 俄に振り返つて憤怒の聲、

「やい／＼何を見るんだ、片ツ端から叩き付けるぞ」

叫ぶや否、木刀ふりあけて立向へば、わツと驚いて一時に遁け出すを、見返りもせず  
 武士の前に跪きぬ、

「仰せの通り只今橋詰の役人へ委細を届けましたところ、御身分がら萬事お構ひなく  
 との事で御坐います」

「むゝそれでよし、して五人の奴は如何いたしたな、あのうちの二人は慥に、やツた  
 筈ぢやが」

「御意に御坐います、二人の奴は腰車と大袋袋で其まゝ、落命、あとの三人も半死半生  
 の體で、これも一命は」

「は、／＼、とても覺束なからう、さて／＼おのれの身も顧みず無法千萬の奴ぢや、  
 時に要助、只今となりの茶屋へ駆け込んだところ、あまり女どもが驚いて騒ぐから  
 其まゝ出て此家へ休息いたしたが、あの女なか／＼見貌の外に落着いて、早速水な  
 ど呉れたぞ」

きくより要助おもはず振り返りて今更に心付けば、お梅そのまゝ、又もや湯呑に水を汲

んで差出しながら、

「おや貴方、いつも御最良に」

「む、お梅さんか、あんまり慌て込んで気が付かなかつた、こりやア乃公の御主人だ、よくまア驚かないで御世話をしてくれた、實アね、本所の御親類へ今日お伴して回向院の前まで歸つて來ると、間盜奴が田舎の老爺らしい懷中を搔つ攫つて遁け出す途端、若旦那様に突き當つたから直ぐ其ま、引ッ捕へて、すられた懷中物を老爺に取返してやつた時、よせば宜かつたに乃公が横合から木刀で叩き倒した上、いやこいふほど蹂躪ツたのを同類の奴が蔭から見居居ッたんだらう、兩國の橋の上まで來ると、前後から五人で不意に出やがって目先の見えねエ馬鹿な奴さ、ほッと出の勤番者か尋常のサンピンと思ツて取ツか、ツたから堪らない、やツといふ間に五人とも忽ち御刀の錆よ、は、は、は、しかし、まづお怪我がなくなつて重疊だツた、相手も

相手に依りけりで、萬一あんな奴に、たとへ摺疵でも、おさせ申しちやアこの乃公が濟まないからなア、え、若様、こりやア下僕が本所へ御使者にまゐります度に、いつも休みます水茶屋で、あの女は梅と申しまして、近ごろ兩國名物の一つに數へられる愛敬女で御坐います、おいお梅さん、どうか此お羽織と袴を、お脱がせ申してね、すぐ駕籠を一挺、傭ツてくれないか、上二番町の大林様といふ御邸宅までだ、なアに宜いよ水は乃公が汲んで御洗足するから」

いひつゝ、盥を持ち來りて主の足を洗へば、お梅は背後より羽織を取りながら、御免遊ばせと自己が櫛もて亂れし髪を搔き上ぐる風情、追はれて遁けしが又もや立戻ツて門口より窺ふ見物三四人、おもはず畜生々々と叫んで地踏鞴を踏みぬ、亂れし頭髪を取上げし後、俄の夕立に濡れし上を五人一時に攔んで引き裂けたる羽織と、血汐の飛びかゝりし袴とを重ねて丁寧に疊みながら、要助に渡して其ま、走せ出

でつゝ駕を備ひ來りしお梅が始終の立振舞、さらに慌てず狼狽へず顔色も變へざるのみか、花の顔いよく冴えて萬事に行届いたる體を、武士は無言のまゝに打守りて今更に驚き怪しみぬ、

やがて來りし駕に打ち乗り、お梅に會釋して要助を招きながら何かを私語けば、はッはッと答へて幅紗包を受取りつゝ、駕を見送りて内へ入りぬ、

「お梅さん、今日は唐突に、とんでもない世話をかけたの、しかし和女が萬事の働き振を、よほど感心して居なすつた様子だぜ、此方は斬るべき奴を斬つてさ、また身分が身分だから大道の衆中で面倒と思つて休息に這入つたんだが、和女の方ぢやア何が何だか理由も分らず不意に血刀を提けて飛び込んだのだからねエ、それを和女その年で其美顔で、少しも驚かないで、いろ／＼行届いた手際にやア第一この乃公が恐れ入つたね、聞きやア隣屋の阿魔なンざア二三人も一時に石臼のやうに腰を抜

かして轉がツたとかいふぢやアないか、はゝゝゝ、時にお梅さん、こりやア少しだがね、まづ今日のお茶代さ、いづれ近日あらためて乃公がお伴して來るよ、其時また何とか御自身で禮をなさるんだらうからね」

「あれ貴方、こんなに大したお金を、お茶代なら、お茶代のやうにして、いたゞきませう」

「いゝよ、宜いから取ツて置きなさい、いつも乃公が本所の往還に、思ふやうな茶代も置けないから、こんな時に總勘定するのさ、はゝゝゝ、」

「それでは貴方、兎も角お預かり致して置きます、まるで今年中の前勘定を、いたゞいたやうですね」

「なアに和女、お持合せさへありやア、まだく下さるところだよ、何、何だ、お名前か、お名前は大林小三郎といつて二千石取の御旗本の御次男さ、親御様の守名の

ある方で、お兄様は將軍家の御側で、飛ぶ鳥も落す勢ひだ、わけてあの小三郎様は番町きつての美男で、俗に業平小三郎と仇名を取ったくらゐだ、お梅さん、お梅さん、おいお梅さん」

「あれ、何ですよ妙に人の顔を」

「罪だぜ罪だぜ、若旦那が今日の和女に感心なすつた御様子といひ、また和女がああ頭髪を搔き上げて居た時、門口の方で堪らず畜生々々と叫んだ双があつたぜ、おい、お梅さん」

「え、知りませんよ、しかし、お歸りなすつたら、どうか殿様に宜しう」

「や、すぐ、さう切り込むから恐ろしい、ぢやア近日また来るよ」

「必ず、お待ち申して居ります」

大林甲斐守の次男小三郎、ことし二十四歳、まだ部屋住の身ながら、親にも兄にも劣らぬ器量ありとて人に持て囃さゝるのみか、そのころ江戸に名高き千葉の門下にて五本の指に数へらるゝほどの武藝者、かつは天生の美男、ならぶものなければ誰いふとなく業平小三郎と仇名すれど、描ける業平よりも一入の凄みを帯びて苦み走りし男振、しかも氣は猛く心は武張つて物に怖れぬ本性、鷹に似たりとて隼の小三郎とも唄はれぬ、

されば今日いかに力業ばかりの下種とはいへど、兩國の橋の上にて前後より不意にかかりし五人の奴原を、電光石火の働き目にも止らず物の美事に斬り斃したる勢ひ、太平の世には思ひの外に人の膽魂を冷して、残る屍の斬口を改めし時は猶更ら天晴の風聞に立ちぬ、

兩國の事ありし後三日目、小三郎たゞ一人おのが部屋の縁端に立出でて、かの要助を庭口より呼び出しながら、

「要助、妙な事を尋ねるが、過日の時に休んだ兩國の水茶屋、あの娘は全體、何者だ、年端もゆかす顔にも似ず、なか／＼氣の確な女で、始終の振舞いかにも不思議に思ふが、あの時の様子では、其方、前々から知ツて居るやうだな」

「へエ、別に懇意と申す譯でも御坐いませんが、あの砌、ちよいと申し上げました通り、本所の御親類へ度々お使にまゐります節、いつも立寄りまして、それがため、へエ、名は梅と申して今年やう／＼十八で御坐いますが、仰せの通り、萬事なか／＼行届いた伶俐者で、第一あの美貌で御坐いますから、ちかごろ兩國の名物お梅といふ評判女で」

「あの時は、たゞ持合せばかりで、其後、さして禮も遣はさず、どう致したもんであ

らう、何か物でも整へてやらうかな、但し金子でも宜からうかな」

「さやうで御坐います、元來が水茶屋で、客の休息いたす度に幾何づつかの茶代を當て、居る家業で御坐いますから、勿論、金子で宜しう存じますが、御身分柄、さて何か反物の類、頭髮の飾り道具か、とにかく思召の長く後へ残るものが喜びませうかと考へます」

「なるほど、では其方、何か見立て、調へた上、持參して遣はせよ」

「恐れ入りますが、同じことなら、お忍びで御氣晴らし、如何で御坐います、日中は熱も厳しう御坐いますし、また店に客も込み合ツて居りませうから、涼風の立ちまする夕景に」

「は、は、は、過日は血刀をさけて不意に飛び込み、今日はまた扇子を使ひながら、さして用もないに行くは異なるもの、しかし兩國の夕景といふものを三四年來さらに見

「た事が無い、幸ひ、行かうかな」

「お邸宅とはまた格別、丁度あの茶屋の裏側が隅田川に沿うて居りますから、夕風を追うて涼み舟などの通ひます體、また兩國の橋を横から斜めに水七分のところを見渡します景色、お茶でも召上ツて御覽になりますれば、第一お氣の保養にも」

「は、は、は、要助なく、效能書が上手だ、しかし遣はす品は」

「いや、それは只今のうちに調べまして、お供の節、持参いたしますやう」

「萬事、其方に任すから、あの娘に似合の物をな」

「その邊は要助、如才は御坐いません」

今日に限りてお梅は心地わるしと、晝ごろより店を閉ぢつ、横川町の路地裏なる家に歸りて身を横へしが、さりとて寝るほどの事にもあらねば、また起き出でて氣を取直

しながら、母と差向うて何をか語れる夕まぐれ、

「兩國に茶屋を出して居なさる、お梅さんの宅は此家ですかね」

「きくより母は娘と顔を見合せながら、そのまゝ振り返りて、

「はい、手前で御坐いますが、どなた様で」

「いや、お目にかゝつたら分りますもんで」

「いひつ、格子戸を引開ければ、お梅それと見て忽ち會釋しながら、

「あら貴方ですか、今ごろ何の御用で、第一こんなところを、よくまア御存じで」

「兩國の方へ往つたところが、いつにない事、店が閉してあるから、となりの女に聞

いて來たんです、お梅さん、ちよいと耳を貸して貰ひたい」

今までは客の中にも風次第に散り來る木葉客、たゞ風體に武家奉公の仲間と知るのみなりしが、その主人といふを思はぬ事に一目みてより何とやら、この要助まで俄に餘



所ならぬ心地して、お梅そのまま、立出づれば、要助そつと差寄りて耳朶に何をか私語きけん、ふしぎや心の一物さらに大の男も及ばざる女ながら、流石に今年やうく十八のお梅、ほつと目元に薄紅を帯びぬ、

要助あらためて持ち來りし反物と別に一封の金子を差出しつゝ、

「お梅さん、こりや過日の御禮で、どうせ氣に入りますまいが、常着にでもして下さ

い、またその一封はね、何か頭髮の道具でもと主人から言ひ付けられたンですが、わ

からない男の見立てるより、本人で好きな物の方が宜からうと思つて、はゝゝゝ、」

「先達、あ、澤山お金を戴いた上、また斯んな御心配をかけましては」

「禮も何も入るもんかね、ぢやア母親に渡して置かう、ところで、今お談話したやうな理由だから、ちよいと其處まで出て下さいな、折角お供して來て、どうも申譯がないンで、それとも此家へお連れ申して來ようかね、逢つて過日の一禮を言ひたい

と仰しやるンだから、御苦勞だが是非とも」

わざと拗ねて眉を擡め小首を傾けしか、眞實その胸に躊躇うて何をか思案せしか、お梅たゞ暫し無言の體、やう／＼振り返りて母に向ひながら、

「おッ母さん、實は過日お話をした、お武家様ね、その方が今日わざ／＼兩國まで、

だとさ、しかし店が閉つて居たから、この御家來が、まで尋ねて來て下さつたの、ちよいと御禮かた／＼伺つて宜しいでせうか、御身分が御身分だから、また何日入らツしやるか分らないし、第一このまゝぢやア、あんまり失禮だからねエ」

「さうだね、店の方のお客様は一切あの店ぎり、ここからは決して伺はないやうにして居るンだが、さういふ方なら、まさか此まゝで、和女さへ氣分が悪くなければ」

「いえ、妾はもう何とも無いがね、ぢやアちよいと、お禮にだけ」

「早く歸つておいでよ、一人で案じるから」

「すぐ歸ッて來ますとも、たゞ、ほんの御挨拶だけに」

鏡に向うて手早く頭髮を撫で付けながら、第一の紅粉は固より用なきお梅、そのまゝ着物を着替へて我家を立出でしが、俄に路地口へ立停りて要助を見返りぬ、

「全體どこに在らッしやるの、いや其處の辻だの、橋の上に納涼がてらだのと嘘でせう、また貴方が無理にお勧め申して來たんぢや無いんですか、もの固い母の手前、何にも言はずに出ましたが、こゝで眞實の事を打ち明けて下さい、何だか妙に、連れ出されるやうな氣がして、きまりが悪いやら、氣味が悪いやらで」

「氣味が悪い、お梅さん、不意に血刀をさけて飛び込んでも驚かない女ぢやア無いか、きまりの悪いか宜いかア知らないが、氣味が悪いが聞いて呆れらア、はゝゝゝ、しかし辻にお待たせ申したの橋の上だのと、なるほど嘘だ、實ア夕景から和女の茶見世へお供したところが、今日に限ッて戸が閉てゝあるから、仕方なしに柳橋の鈴

本といふ船宿へ兎も角も御案内して置いたのさ、いくら過日の禮があるたアいへ、お梅さん、あの御身分で、わざゝゝ上二番町から兩國くんだりまで來ようといふ思召だもの、あんまり平生の一流で、萬事を人なやませの思はせ振、すけなく跳ね返しちやア情が無さ過ぎるぜ」

「ほゝゝゝ、高が水茶屋家業で、妾のやうな女に何が」

「いや、さうではない、此奴ばかりは別だ、上も下もあるもんかね、さア文句は後にして行かう」

「行きますがね、もし御酒なぞ出て、あまり長くなると困りますよ、妾は兎も角、御身分から御迷惑な風聞でも立つと申譯が御坐いませんから、とかく人といふものは、いろんな事を騒ぎたがるものでねエ、妾が、あゝ固くして居てさへ、御苦勞千萬に、つまらない餘計な詮議立をする人があるんですから」

「は、は、は、當然さ、鐵の函を三重にして四方から錠前を卸したって、透き通るほどの美貌だもの、誰が無事に置くもんか、やかましよう言はない奴は木か石さ」

「そんな事を仰しやると本當に受けますよ、本當といへば本當に、あの方はどんな御氣性、お見かけ申したところは、お優しいやうですが、一時に五人も人を斬つて落付いて在らつしたほどですから、噯、第一、妾がね、水を差上げた時、手の指も震へず、しづかに取つて召上りましたからねエ」

大きくや否、要助おもはず俄に振り返つて、お梅の顔を今更に見詰めながら、

「侍が不意に五人も斬つて落着いたより、十八の處女が、すぐ水を持って出て指頭の震はなかつたところまで見届けるたア、お梅さん、實に驚いたもんだな、何だか怖いやうな女だな」

柳橋の船宿鈴本の二階に大林小三郎たゞ一人、端近く出でて夕暮の川風に身を吹かせ

ながら、懷中より謠曲の小本を取出して幽に唄ふ折しも、要助まづ上り來りて笑を含みながら、

「下されもの本人に遣はしました上、一應お禮のため只今、階下まで召連れまして御坐います」

「む、さうか、あけてやれ、其方も今日は一坐で飲むが宜い、無禮講だ、その代り當家の女ども、一切無用にして、祝儀だけ多分に取らせよ」

はツと答へて要助そのまゝ階下に行きしが、やがて伴ひ來りしお梅、血刀の時は驚きもせで今日は却つて何とやら、顔うち赤めて差俯ける風情、しづかに身を縮めて兩手を支へながら、

「過日は、まことに不行届の事ばかり、それに其節、過分の御茶代を下さりました、また今日は、いろ／＼の下されもの」

「は、ゝ、禮を申すほどの品ではない、しかし今日は迷惑だな」

「どう致しまして、萬事、この通り不束女で」

「いや、過日の始末、なか／＼歴々の武家生育にも珍らしいくらの振舞、感心いたした、さアずつとこれへ来て、要助、涼しい方へ廻してやらんか」

「いえ／＼これで結構で御坐います」

「お梅さん、あ、仰しやるんだから、お免蒙って、そつちの涼しいところへ出るが宜

いぢやないか、こゝは御邸宅と違つて、いはゞ御氣晴らしに入らしつたのだから」

「あれ、何を遊ばすんです」

「これ要助、さう背後から突く奴があるか」

「へ、ゝ、ゝ、立って働く時は人竝すぐれて身の軽い女で御坐いますが、かう坐つた時は、なか／＼動かない重い尻で、いや重い臀ですから、ちよいと、つつきました

ので、お梅さん、ぐづくしてると、また突き出すよ、三度目には捻るぜ」

やがて運び出でし用意の酒肴に、要助一人が咽喉を鳴らしつ、座を持つての働き振、小三郎も元來が上戸ならねば數盃を傾けて悠然と酔ひし體、お梅は猶更の下戸、やうやう強ひられて一二杯を重ねしのみ、はや満面ほつと染め出す紅に雪の額の生際いよいよ白く際立ちて、指の爪頭まで色づきつ、果は息さへ急しう、堪へ兼ねる風情にて縁の端近く膝行り寄りながら、いつしか欄干に俯して吹き送る涼風を襟首に通はせ、をり／＼の忍び目に小三郎を偷み見る體、知るや知らずや此方も酔うて縁の柱に脊を持たせつ、軽く扇子に小膝を叩いて申音の小謠一節、をりしも要助は座を起つて、ここに二人を窺ふものは暮れ果てし夏の空の月、たゞ羨ましげに射し入るのみ、

「これ梅、そちに兩親はあるかな」

「はい、母が一人」

「む、父は」

「歿りましてから、こととして三年目」

「何を致して居った」

「お恥づかしう御坐いますが、大工家業を」

「大工、はて大工にしては、過分の娘を持ったもの」

「その大工も、只今の母も、實は義理ある中で御坐いまして」

「む、して、まことの親は」

「身分の低いものでは御坐いましたが、やはり武家の端で」

「や、それで分った、なるほど、種ぢや、名は何と申したな」

「どうか、今、しばらくの間、その事は」

「何か仔細あると見えるな、きくまい、きくまいが梅、何日か聞かしてくれぬかな、

人はいはれぬ父の來歴を、其方から安心して聞くやうになつて、見たいぞ、は、

は、

「ほ、いづれ其うち、お願い申してなりと、きいて戴きたう御坐います」

「きつと聞くぞ、今日は此ま、歸るが、梅、忘れるな、たしかに聞くぞ、いはせるぞ

よ」

「きつと、きつと申し上げたう御坐いますが、かやうな賤しい家業を致して居ります

女」

「家業は兎も角、其方の、いや今日は此ま、いふまい、は、」

「妾も母が案じて、待つて居りませうから、今日はこれで、御免を蒙りたう御坐いま

す」

「それが宜からう、あまり長居は却つて異なるもの、さア要助を呼んで送らさう」

「いえ、まだ宵のうちで、幸ひ月も御坐いますから」  
 「いや、月があつても宵のうちでも油断大敵、途中で何者が盗むかも知れない、しかと母の手に渡すまでは、は、は、は、」  
 「ほ、ほ、ほ、もし間違つて盗む者でも御坐いましたら、却つて、あとで迷惑いたしませう」

「それは其筈、こゝにこれ大林小三郎といふ奴が、一刀ふりかぶつて斬り込むもの、は、は、は、」

## 其九

柳橋の船宿鈴木を人知れず忍ぶ戀路の堪として、お梅その後をりく通ひしが、必す夜半の頃までには彼の要助が附き添うて歸りしかば、母も流石それとは知りながら、

今は現在お梅がために浮世の憂節もなく養はるゝ身、まして其人を聞けば思ひの外に歴々の武家衆、朝夕立騒いで水茶屋に出入する賤しい身柄でも無ければ、其日々々の家業に差觸るべき筈もなく、いづれ一度は持つべき男、持たすべき娘の身に、生涯あのままの處女で押通さるゝものでもなしと、始めのうちは唯知らぬ顔して打ち過ぎしが、いつしか互に語り語られて今は母子の中の力草、ゆうべの残る口説を今朝の母に向うて怨みがましよう言へば、母もまた思はず笑うて何處ともなく遁け出すやうになりぬ、戀は曲物、おもへば情に募り、募れば身にも徹へて、をりく兩國の茶屋も店を閉しつゝ、不斷の花と唄はれし名物お梅の出ぬ日もあるのみか、このごろ何とやら氣も心も上の空めいて、今までの萬人一様に迎へし愛敬もなく、動もすれば憂さけに眉を顰めて物思ふ風情、呼ばれて僅に見返りながら、やうく的外れし應答さへする體を、かの上汐の勘太、いよくくわつと急き込んで、あるにもあらぬ心の嫉妬、お

のれやれ、ぬしは誰ぞと目を敬て、覗ひぬ、

今までは絶えぬ情を割いて夜半に歸りしかど、重なる逢ふ瀬に思ひの数も積りて、母にも打明けし此ごろは曉の鐘に促されつゝ、きぬぐ餘波惜しげに鴉の聲を怨みながら立出づる夏の空、まだ往來に人は通はねど夜半にもあらねど只一人、横山町の我家に歸らんとする折しも、ぬつと此方の軒下より現はれたるは上汐の勘太、

「おツ、お梅さん、もう夜は明けたぜ、狼狽へた夢の見残しか戸惑ひか、どこから何處へ往くのだ」

南無三寶、はつと思ひしが、遁れぬ瀬戸に落ちては大の男も蹂躪るほどのお梅、ほとと笑うて靜に振り返りながら、

「あれまア、誰かと思ひましたよ、妾よりも貴方こそ今頃、どこから何處へお出でな

さいましたの、殿達には夜半より怪しい夜明の一人歩き、どうせ人の知らない、ほ、ほ、人には言はれない、憎い花里からの御歸途でせう、ゆうべの痴話でも聞きたい事ね、ちつとお寄りなさいましたな、御諫言の仕手もないから、妾が目の醒めるやうな濃い澁いお茶でも差上げませう」

目色も變へず逆に捻つて倒さまに突き出したる一言、流石の勘太おもはず呆れながら一入さらに嫉妬の火焰むらくと燃えて歩み寄りぬ、

「おい／＼朝ツぱらから何のこつた、自分が喰ひ飽きた前夜の馳走、お裾分け致しませぬねエもんだ、かうお梅さん、知らねエと思つてるか、蛇の道は蚯蚓と行くめエが、じやの道は蛇だ、面ア生白くつても心の黒い和女だから如才も無からうが、實アかう／＼だと明しても大した損はあるめエ、そも／＼誰が兩國で名物お梅の幕を張つたんだ、をかしくもねエ樂屋狂言ばかりすると、あの淺黄幕を切つて落すぞ」

「何だか、さッぱり妾には分りませんが、おい／＼今に人も出ませうし、この往來中で、それよりか家か店かへ來てゆつくりと、理由を聞かして下さいな」

「へん、凄まじい、家だの店だのと、誰の家だ、誰の店だ、上汐の勘太ア和女の子分でも下馬でもねエゼ、心に何とか思ッて言譯の一つ二つする氣なら、乃公が巢へ來て謝るが宜い」

「謝れと、お言ひなさるの、いえさ用があれば何處へでも行くお梅ですが、あやまりに行くほどの家は、今のところ、今の身に取ッて一軒も御坐いませんわ」

「よし、さう言やア其決心で居るから、あの水茶屋あのまゝで立派に張り通して見ろ、上汐の勘太が目で睨んだぞ」

「黒い目か白い目か今更、そんな怖い事をいはずに、どうかねエ、お手柔かにして下さいな、これが仇敵同士といふではなし、高が十八の處女を相手になすツちやア

却ッてお名前が

「何だ、處女だ、おい／＼いつまで處女で通ると思ッてるんだ、高が十八も聞いて呆れらア」

「とにかく後刻ほどねエ」

「どうでも勝手にしろッ」

「あれ、さう仰しやらずに、どうか今まで通りの御指圖を願ひます」  
「畜生ふざけやアがるな、覺えて居ろ」

上汐勘太が戀と慾との兩道を取外せしより、俄に嫉妬と憤怒の目色を現はしつゝ、いつ何時いかなる怨恨を報いんかとは兼ての覺悟、今更ら慌て、恐るゝには足らねども、やぶれかぶれの裸體奴に行末ながき此身の運を削られては叶はじと、お梅こゝに思案



を定め、一夜逢ふ瀬に小三郎へ對ひつゝ、あの水茶屋を出せし時これくの男に五十兩を借りしが災禍の基、このごろの様子を悟りて俄に厳しき催促、もし滞らば何と世間へ取沙汰するやら心の知れぬものと、眉を擧めて打語れば小三郎おもはず笑を含みて、そもく我といふ者あるに、それほどの金に苦しむ事やある、第一、さる奴に義理を負うては身の爲めならずと、世にいふ切餅二俵、二十五兩の包みを二個ころりと抛け出しぬ、

もとは川風に散らせし伊勢屋の證文一枚を拾はれしがため、しかも互ひの約束上その金を兩斷に分けしかば、預けたりとて半金は固より我物、されば水茶屋を出せし入費も我物にて、さのみ思も義理もなく猶更ら返すべき筈は無けれど、人知れぬ弱身に崇つて附け込む厄病神、わづかの金のゆる文句を吐かして大事の前の小事を破るも無念ぞと、その五十兩を例の鬼勝の許へ携へながら、委細は言はず、唯あの水茶屋に借り入

れし金、後の證據に男の手より返してほしと頼めば、上州勝も横手を拍ツて、なるほど念の入れどころと、おのれが子分に持たせて勘太が膝へ叩き返しぬ、動きの取れぬ柵にかけて救ひ手のなき深いところへ落した上、兩國の名物女を我物にせんと思ひし勘太、ぬしは知らねど油斷大敵いつしか餘所の色香にせられしのみか、思ひの外なる五十兩の金、しかも近ごろ遺恨を含む鬼勝の手より叩き返されて、あつと呆れながらも一念いよく曳き出す横車、さては鬼勝奴が入らざる喧嘩の買出しか、その色男めが抛け出せし一物か、いづれにせよ本尊お梅あのまゝ無事に置くべきやと、今は戀も慾も打ち捨て、日夜に積る怨恨の刃を磨ぎぬ、されど無念や今は一歩おくれたり、乙に搦んで吐き出す文句の緒は五十兩の耳を揃へて返されたるのみか、片脚あけて踏み潰すべき彼女の本陣あの水茶屋には必ず鬼勝めの蔭武者あるに相違なし、唯この上は人知れず忍び逢ふ男の正體を見届けて、まづ其

奴から取ッて占めんと思ひつゝ、日夜八方に眼を配ッて腕を擦りぬ、

柳様の船宿鈴本の仕立にて、夕暮より今夜の月見舟を漕ぎ出せしが、客は知らねど女は慥に名物お梅と、馳け込んで注進するものありしかば、をりしも晩酌の膳に對ひし上汐の勘太、おもはず持てる盃を抛け棄て、立上りながら、月は野にも山にも照るものを水の上とは運の果、そッ首たゝいて我手に入りしも同然、どれほど痴話に狂うて夜を更かすとも曉までは浮ぶまい、知らぬが佛のお迎ひ受けて歸り際、うかく漕ぎ戻る河岸は七箇所、それ手を分けて網を張れと自己が子分を配りながら、鈴本ならば此所ぞと思ふところへ其身は用意の一腰うち込んで待ち掛けぬ、空てる月も次第に傾きて音なき夜露も深く、流るゝ隅田川の水さへ汐合いつしか沈みし頃、足輕の小家形舟一艘、鈴本の岸を望んで漕ぎ寄せ來りぬ、

勘太は腹心の子分三人を半町あまりの彼方に遠ざけながら、月を脊に浴びて河岸の捨て石に腰うちかけつゝ、白銀を砕くが如き水の面を眺めて何氣なき體、漕ぎ來る舟は斯くとも知らず櫓を捨て、棹に代へ、はや岸近く棧橋に寄せしかば、まぢかねて舟中より飛び上つたるは要助、振り返りながら中腰に差覗きつゝ、

「お梅さん、氣をお付け申してくんなよ、大分に酔ッて在らッしやるから」

大きくより勘太ぬツと起ち上りて、さながら荒鷲の小鳥を覗ふが如く、河岸の上より舟の中を覗んで、おのれ出るが最後、女ならば其まゝ水に蹴落しけれむ、男ならば引き摺り上げて踏んでくれんと、隈なき月の光りに透して待ち受くる折しも、あらはれ出でしは大林小三郎、つゞいて名物お梅、その腰の邊りに手をかけて、

「お危う御坐いますよ、あれ、お待ち遊ばせ、要助さん、お手をお取り申さないかね

エ」

「いや氣遣ひ致すな、大丈夫、酔ッても大丈夫、これ要助、手前こゝへ立戻ッて梅の手を取ッてやれ」

はッと答へて要助そのまゝ、又もや舟に乗り移れば、小三郎まづ棧橋に足ふみかけて河岸へ上りながら、二歩三歩、行き過ぎんとせし背後より、

「青侍、待て、ついでに舟の中の賣女め、奴もろとも出ろッ」

今時の女に好かるゝ腰拔武士、はッと驚いて度を失ふかと思ひの外、怖ろしや聲に隔てを知ッたりけん更に慌てし風情もなく、しづかに振り返ッて空てる月を打守りながら、

「呼び止めたは其方か、こりや舟の中そのまゝ、出るなく」

いひつゝ、立戻ッたるを見れば、月に向うて一入白き顔面に物凄く光りし眼中、着流しの落し兩刀、しかも早や大刀の鏝際に左手を添へながら、右手に持てる扇子を逆に取り

ツて何とやら肩を張り腰を据ゑし體、

「もし人違ひでは無いか、しかと見い、うろたへて無禮を働かば許さんぞ」

素破といはゞ忽ち電光石火、ぬき打にすべき勢ひ見えて寸隙もなし、をりしも舟の中よりお梅が聲、

「あれ、勘太さんぢやないか、をかした事をしなさんな、的が外れて相手が違ッてる

よ、折角の男振が潰れるよ、ほゝゝゝ」

あまり落付いたる武士の體に、流石の勘太も案に相違して聊か躊躇ひしが、舟の中よりお梅に聲かけられて今は絶體絶命、まづ男を水に組み落して得手の水中に働かんと無言のまゝ、躍りかゝッて組み付くや否、やツと叫びし聲もろとも、あはれ五體は宙に

翻ッて自己まづ抛け込まれぬ、さツと立ちし水音に驚いて、舟の中より飛び上りし要助、お梅も我を忘れて其まゝ、馳

け上れば、小三郎ぬツと岸に立ツて月代に透し見ながら、

「は、は、は、脆い奴、しかし双物三味せずに組み付いて來居ッたは僥倖な奴、あれあれ泳いで向ふの岸へ渡り居るわ、さて水練は得手と見えるな」

お梅は其ま、物もいはで小三郎の手を取りつゝ、足早に鈴木へ走せ入らんとする折しも彼方より驅け來りし三人の男、今の水音は敵と思ひの外の驚愕、たゞ呆れて立ッたる體を、小三郎それと知りてお梅を背後に圍ひながら、

「其方共も、抛けてほしい奴が」

いひつゝ、摺り寄ツて兩眼ぐツと睨めば、三人いよく怖れて打守るのみ、

「要助、梅を連れて早く往け、あとは慰み半分、は、は、は、人間の手鞠を取ツて見ようわ」

いふや否、すツと戯れに身を沈ませば、三人おもはず飛び上ツて一散に遁け出しぬ、

## 其十

水に投げられて水に死すべき奴ならねば、前夜の事より一入さらに怨恨も深く、よしや一方の盾に鬼勝ありとはいひながら、朝夕わが身に添うて守るにもあらず、たとひ生涯の力に彼人ありとはいひながら、晴れて連れ添ふ妻にもあらず、されば母子たゞ二人このまゝ無事に目を送るが嬉しきとて、日夜あの厄病神に規はれては安き心も無きのみか、そもく伊勢屋の事より我本性を知りぬいたる奴、無念の餘り喚き立て、世間へ觸れ歩くやら、口惜まぎれに如何なる悪智慧しほりて結びし戀の赤繩を斷たるやら、何としても身に取ツては附き纏ふ始終の邪魔物、をめぐく嫉妬怨恨の的に射られて落されんよりは、幸ひ今は家業の水茶屋そのまゝ閉ぢても頼む木の下に雨漏らぬ身、しばし土地を變へ姿を隠して後、機會よくば一足飛の王の輿、二千石の邸宅に

浮世を知らぬ春の夢みたしとぞ思ひ込みぬ、

人知れぬ小料理屋の奥二階に、わざと客なき朝のうちを幸ひ、かの要助と名物お梅が  
差向うて、四邊を憚り聲を潜めつゝ、中間を隔てし数々の酒肴よりも、心の獻立うち  
開いて頻りに物語りぬ、

「わざ、**あや**急ぎのお使者に来て下すツツたの、こんなところへ無理に引き上げて濟み

ませんかね、要助さん、今日は少々、折り入って御相談が致したいので」

「いや、こんな無理なら何時でも承知する男、はゝゝゝ、しかし、かう不意に御馳

走して貰った上、つまり飲まして置いての御相談、薄氣味が悪いね、まさか生膽を

呉れといふやうな怖ろしいこつちやア無いでせうな」

「ほゝゝゝ、いつも暢氣な事ばかり、實は外でも御坐いませんかね、妾、あの家業が

嫌になりましたの、毎日々々朝夕、どこの馬の骨か牛の骨か知れもしない客を相手

に、くだらない忙がしい目ばかりしてさ、それも今までのやうに、一日怠れば一日

困るといふ時なら格別、ふしぎの御縁で、何の不自由もなく、かう結構に御手當を

戴いて居るんですからねエ」

「なるほど、さうだな、今までと違つて、實のところをいへば、もう世間へ安く顔を

曝せない身だよ」

「だから思ひきつて、廢めて仕舞ひたいのぞす、そればかりか、そら過日の月見舟の

やうに、とんでもない岡焼の手強い狂氣が現はれますから猶更、ねエ」

「そりやア廢めた方が宜いね、尋常の女と違つて兩國の名物、これまで落とし手が無い

で嘸されて居たのさ、そこへ急に持手が極つたと知れた曉は、どうせ天下太平で治

まらないよ、しかし要助に相談して廢めたとなつちやア少々困りますね、ともかく

「伺ッた上にした方が確實だらう、伺へば、すぐ廢めて仕舞へと仰しやるに極ッてるがね、念のためだ」

「それでは伺ッた上に致しませう、ところで要助さん、あの水茶屋を廢める時には、外の十一軒から株のお金が十五兩ほど來ますから、それは貴方に、お上げ申しますよ」

「えッ、十五兩、あの十五兩を下さるのか、そりやア有難い、ぢやアお梅さん、いッそ伺はないで今日すぐ廢めたら如何だね、伺ッたところが廢めると仰しやるは必定、また客足の淋しい外の茶屋と違ッで、今まで十二軒の繁昌を一人で脊負ッて立ッた名物お梅が急に廢めるのだから、談判の仕様に依ッて十五兩のところを二十兩くらゐになりさうなもんだね」

「ほ、ほ、ほ、まア要助さんの現金な事、あまり正直過ぎて御挨拶に困りますッ」

「は、は、は、とここで相談といふなア、それだけの事ですかね」

「い、え、そればかりなら、別に御無理を願ッて、こゝまで來て戴かないでも宜いんですが、實は、店を閉めると直ぐ、どツか人に知れないところへ、轉宅したいんですの」

「なるほど、急に店を閉したら、猶更ら人が詮議立して面倒だらう」

「母子たゞ二人ですから、どんな小さな家でも構ひませんが、ならう事なら、をりをり殿様が入らしッても、さのみ差間のないやうな家をね、第一あゝして船宿なぞへしけくお越になつて居ては、御身分がら、もし妙な間違ひのあつた時、また御心配のある筈は御坐いますまいが、お入用も、なか／＼重りますからねエ」

「や、そろ／＼世帯じみて來たね、しかし感心だ、行届いたもんだ」

「それを、妾から申し上げてても宜いやうなもんですが、一切、そんな差出がましい

ことは、つねぐ母から固く止められて居りますから、要助さん、どうか貴方の御  
 考案として、いつか御機嫌の宜しい時に、願ひたいので、ねエ」

「委細承知、つまり願はれるンでも無い、手柄を譲ッて貰ふやうなもんだ、は、は、は、は、」

「妾は、こんな賤しい不束な性質ですから、いつ何時、思召に叶はなくなるかも知れ  
 ませんが、要助さん、貴方だけは末長く、妹のやうに思ッて下さいよ、妾も同胞は  
 なし、義理ある母一人で」

「こりやア痛み入ッた事だね、この要助が、お梅さんの兄たア少々お荷物が重過ぎて  
 満足に歩けませんぜ」

「あるけても歩けなくツても、是非お願ひ申しますよ、最初の橋渡し、いはば月下氷  
 人も貴方ですから、また泣きの涙で秋の扇と捨てられた時も、どうせ貴方の御厄介

もの」

「は、は、は、その邊の心配なら御無用々々、たとひ天地が倒さまになるとも、決し  
 て決して、それどころか今に玉の輿のお迎ひが行くかも知れないくらゐだ、その時は  
 お梅さん、これ要助、履物を直したも、はッ、これ要助、供して来や、はッ、萬  
 事この邊は當然ですが、あの要助は嫌な奴などと云ッて追ひ出しちやア恨みますぜ、  
 は、は、は、」

「ほ、は、は、屋根の上と床の下、そんな事は、全く夢にも思ひませんが、もし萬々一  
 もしお邸宅の御都合さへ、さして、お構ひ御坐いませねば、せめて一度、お小姓が  
 はりの御奉公がして見たう御坐いますよ、どれほど、お情を蒙ッても、つね平生お  
 別れ申して居ては、それより朝夕お傍に居て、ねエ要助さん」

「そりやアお梅さん、むづかしい事でも無いが、内々は兎も角、表面だけは、まづ、

お小間使といふ譯で、しかし、危険なお小間使だな、もし奥様が外からでも來れば、忽ち大騒動、いよくお家の珍事出來で、この要助なンざア一番に遣られる口だね、奥様の方からは元來あの者が最初を取持ったのだと言つて憎まれ、また此方からは元の素性も萬事の内幕も知つて居る奴、生け置いては何かの妨害といふやうな譯で、こりやア雙方どツちへ廻つても助からないぜ、は、は、は、今のうち水茶屋の株十五兩貫ツて遁け出さうかね」

「ほ、は、は、まるで芝居にありさうですなエ」

「まづ今日の狂言は、これツきりで打出さうかな」

「もう、お歸りなさいますの、それでは今お願い申した事は、どうか宜しう」

「おツと承知、呑込み過ぎて忘れないうち、如才なく伺つて都合の宜いやうにするから」

鐘一つ賣れぬ日はなしといふ江戸の繁昌も、こゝに半を奪はるゝ兩國の賑ひ、その兩國に不斷の花といはれて色香も深き名物お梅、中には連も叶はぬ戀を捨て、目を敬つゝ、萬人に思ひを惱ませし身の末いかならん、男冥利に盡き果て、昔も今も小町が成れの果、どうせ小唄に唄はるゝ浮世の露の語り草、さても面白い見物ぢやとて日夜に立騒ぎし其水茶屋が音もなく消え果て、俄に店の戸を閉固めしかば、あツと呆れて一夜の嵐に落花狼藉、香さへ残らず散り行きし行方いづこと口惜がりて、何者が擱んで退いた、天狗か魔物か雷か、よもや人間業ではあるまじとぞ騒ぎ立てぬ、

其十一

お梅母子が打連れて近き横町の錢湯に行きしかと思ふばかり、たゞ何氣なき常着のま



まに立出でし後より、かの要助が入り来りて俄に世帯を取片づけつゝ、それ〴〵近處合壁へも分に過ぎたる音物を配り、仔細あつて此まゝ歸らぬ二人の母子と挨拶せしかば、いづれも驚きながら風聞とり〴〵、要助の風體を見て必定いづれかの邸宅へ引取られしとは知れど、さて行方の知れぬ玉の輿、子を生むなら女ぢやくと喚き立てぬ、

心は折るに委さず氣は踏まれねど、今までは主も定めぬ路傍の花、朝夕たえまなき浮世に面を曝して知る知らぬ萬人の戀に慕はれしが、きのふ今日は唯ひとりの人に月花と眺められて、ふかき色香を包まれながら、人知れず情の露を含んで媚びぬ、

江戸隨一の大川を我物として上汐の勘太ともいはれし男が、ことし十八の小女郎に素

丁稚の如く追ひ使はれ追ひ廻されて、揚句の果に嚙んで吐き出されし無念心外も、はや戀も慾も捨て、かゝつて待ち受けし月見舟、痛いか痒いか怨恨の荒療治してくれんとせしに、忍ぶ情の男といふ奴、兩刀さしても尋常の青二歳と思ひの外、こいつも外見によらぬ白むく鐵火、忽ち取つて抛けられ不覺の上の不覺を重ねしかど、幸ひ得手の水に遁れし曉、おのれ此上は彼女の根を掘り根性骨の底を叩いてやらんと覘ひし甲斐もなく、兩國の水茶屋も横山町の家も一時に閉ぢて行方知れずとなりしかば、さすがの勘太おもはず大息ついて舌を巻きぬ、

されど四里四方の江戸市中、いづこの隅に隠るゝとも彼ほどの女、人の目に付き風聞に立たぬ筈なければ、結句この脚下にうろついて我鼻頭の曲らんよりは、幸ひ鬼勝めが手の届かぬところ、縁も由縁もない繩張外に見付け出して、二度と再び世に出られぬまでの返報、しやツ面を蹂躪つて生きながら不具にしてくれん、もしや此こと叶は

すば上汐の勘太ことし三十一、頭髮剃り落して坊主にならんと叫びつゝ、さながら親の敵を覘ふが如く血眼になつて八方を探し廻りぬ、

立てられて男を磨く上州勝、敵に對うて二の足ふまぬ鬼勝、兩腕組んで物の分別する時は尋常の勝藏とまで囃されて、善にも悪にも浮世の兩道かけて踏み抜いたる剛の者ながら、ことし十八の花の姿のお梅には流石に小首を捻つて驚かさぬ、

世間なみくくの目からは、夜ふけて我家の廁に行くさへ怖るゝほどの顔貌、男に物いはれて胸の轟き止まぬ芳紀ながら、この上州勝を退かぬ男と見込んで始めて來りし時、はや本所の伊勢屋が事より上汐の勘太を逆に捻つて手玉に取りし一切、さらりと打ち明けて顔色を變へざるのみか、我をも時の道具に使うて暴風の盾にせんとの一物、さては此女、諺にいふ小腕の大膽、面白の腹黒、みかけ泣かせの裏刃、いばら牡丹の花

の色香と思ひし處女の今でさへこれほどの女、こゝ四五五年の後には如何なる檜舞臺を構へて浮世の狂言を仕組むかと、戀より外の凄いとこゝろに惚れ込んだる鬼勝、幸ひ子はなし先方に父なし、ならば父子の縁を結んで今より百層倍の腕を添へんと思ひしに、兩國の水茶屋も横山町も一時に閉ぢて行方知れずと聞きし時、これはまた格別の無念心外、さながら掌中の玉を取られし心地して口惜しがりぬ、

されど元來あれほどの女、いはゞ敵を防いで味方となりし此鬼勝を此まゝ捨て、去るべき筈なし、いづれ一言そのうちに音信あらんと思ひし折しも、姿を隠せしより五日目の夜、門口に一挺の駕を乗り捨て、入り來りしは名物お梅、さてこそと膝を叩いて我鼻を蠢かしぬ、

人なき奥の一室に伴へば、なるほど世間の男が魂魄脱殻となつて騒ぎしも道理、今更ながら戀なき目にも覺むるばかりの容色、さらに一入の艶を含んで膝を進めつゝ、

「縁も由縁もない妾を、あれほど厚いお世話、お力になつて下さいました貴方に一言の挨拶もせず、あのまゝ急に家も店も閉めて仕舞つて、風のやうに消えましたのも、實はね、いろく理由のある事で御坐いました」

「は、は、は、理由も理由、一筋や二筋の理由で、さうなるお梅さんぢやアあるめエが、まア過ぎ去つた事は宜いとして、今どこに居なさるね」

「はい、これも少々、人には憚りませんが、貴方だけに、只今は麴町の平河町に、あのお天神様の横手に、やはり母と二人で」

「む、随分、江戸市中ぢやア高飛だつたね、しかし、おツ母さんと二人ぎりぢやアあるめエ、近ごろ出来た金より生命より大事な人も居る筈だが、いえさ、世間の奴等や現在あの上汐なぞと違つて、嫉く方の役廻りでねエから安心して明かしなせエ、いつか店で勘太が落ち合つた時、生涯を男嫌ひで通してほしいと言つた事は言つたが、

ありやア時の意氣張から出た言葉で、實ア無理な注文さ、その美色で其芳紀だもの、どうせ一人は持つが當然さ、しかし、名物お梅さんの凄目鏡に叶つた男が見てエよ、まさか尋常の端た野郎ぢやあるめエ、は、は、は、なぜ今夜、一緒に連れて來なさらねエんだ、お親密になつて置く筈だにさ」

「あれ、まアさう何から何まで、眞正面から打ち込まれましたは、は、は、は、御挨拶に困ります、實は、又かと、うるさく思召しませうが、それは是に就いて、この梅が是非、貴方へ折入つて、今夜ア母にも、その人にも隠して伺ひましたので」

「おツ母さんは兎も角、可愛い其人にまで隠れて來たとア、全體どんな事で」

「かう申しては何だか、妙に、呵しいやうで御坐いますがね、實は其、その人の身分から、お話し致さないと分らない事で」

「おツと、お梅さん、恍惚を抜きにして萬事あつさりと頼むよ、その人の事をいふも

「宜いが、初戀の大上氣で、あんまり委しう聞かされ過ぎちやア、いくら鬼勝だつて少しやア妬けるからね、は、は、は、」

「ほ、ほ、ほ、いえさ、そんな上の空で伺ったのぢやア御坐いませンの、實は妾の身の生涯、行末の事に就いて、しんみりと沈んだ談話」

「ぢやア本筋の大真面目だね、して其人といふなア全體」

「實はねエ旗本で、二千石取の御次男、ことしが二十四、親御は守名のある方で、お兄様は公方様のお側で、今のところ、まだ部屋住では御坐いますがね、お、それそれ、いつか兩國の橋の上で、間盜を五人、一時に斬ったといふ噂が御坐いましたらう、その方ですよ、あの時、妾の店へ血刀を提げたま、で駆け込んで入らしつてね、及ばずながら、お世話申したのが縁の端で、それからの事」

「む、あの橋の上で、あの時の侍か、現場は知らなかつたが、うちの野郎が見て來たつて、その手際に驚いた談話を聞いたが、む、さうかい、や、流石お梅さんだ、大變な男を持つたもんだ、しかも俳優のやうな美しい男だといふぢやアねエか、猫でもねエが、よく取った、よく咬へた、世間中を喚き歩いて自慢しても宜いくらるだ、なるほど上汐の勘太ぢやア飛んでも跳ねても齒が立たねエ筈だ、まるで物が違つてるからよ、は、は、は、」

「しかし今申す通りで、妾とは根から身分が相違して居ますから、をりく、忍んで入らつしやるんですがね、妾も不束ながら縁あつて折角かうなつた上は、いつまで世間を憚る日蔭の身で居たくなし、ならう事ならねエ、どうかして、お邸宅の方へ這入りたいと思ひますのさ」

「む、なるほど、氏がなくつても玉の輿、腕で乗り込まうといふんだな」

「いえ、さういふと何だか、お家騒動を惹き起す悪い御部屋のやうに聞えますがね、

妾のやうな浅い女に、そんな怖ろしい深い企謀のあらう筈はなし、また、これが何萬石といふお大名の家でもなしさ、現在まだ親御が世を取って在らっしゃるのみか、お兄様もあるんですから、よし思つたつて逆も無効ですがね、それよりも外に少々、まづ平ツたく言へば、ほゞ、離れて居たくないといふくらゐの事ですよ、しかし、それに就いて貴方へ是非、お願いが御坐いましたね」

「む、乗り込んで玉の輿でもねエ外に、只この邸宅へ這入りてエといふ、それに就いて、この鬼勝へ、全體どんなこつたね、ちと談話の調子が分らないやうで變だね、辻褄がさ」

「きいて下さいませうね、貴方が、うんとさへ一言、いって下さりやア、妾も思ひきつて、やります決心、その代り、かう申しちやアお氣に觸るかも知れませんが、この梅が、きつと貴方を江戸一番の男に致しますから」

上州勝おもはず腕を組んで眉を寄せつ、暫し考へしが、何をか悟りけん、我みづから我に首肯いて膝を進めつ、今更にお梅の顔じつと見詰めながら、

「お梅さん、何だね、つまらねエ、二度も繰返すにやア及ばねエこつた、實ア鬼勝の氣を引いて目色を見るため、心の裏表を引つくり返して言つたんだらう、はゞ、つまり名物お梅が家の次男を抱いて二千石を取るか取り損ねるか、この鬼勝が江戸一番の男になるか、ならねエか、互に陰陽なく助け合つて一狂言を仕組まうといふんだね、なるほど面白い、もう乃公も四十の上を三年も越して身の素性から今日までの成立を言やア、随分この首の四個五個あつても足らねエ男だ、さうざ野郎の膽の太エ奴にも當つて来て喧嘩三昧にも飽きた時だから、お梅さんのやうな凄いな花を娘分にして氣の變つた邸宅を相手にして見ようかな」

「怖いほど妾の胸裡が見えますことねエ」

「別に見える目でもねエが、心の裏の前口上があつて、其上この鬼勝を江戸一番の男にすると言つた一言で、は、アと氣が付いたのさ、ぢやア現在その人の御親といふなア、公義の重い役人だな」

「實はね、大林甲斐守といつて」

「む、そりやア當時有名の町奉行だ、なるほど、いよく分つて来た、兄を蹴落して次男の色男を世に立てた上、親譲りの役柄でもねエが、その町奉行まで取らうといふんだね」

「夢を眞實にしたいのですよ」

「いや、随分、事と品に依つちやア腕次第で夢も眞實になるさ、よし、乗つた、しつかり遣なせエ、及ばずながら、この鬼勝が生命がけで前立にも脇立にも後立にもなるから」

「ほ、ほ、ほ、もし萬一仕損じた曉は、あの人を抱き下して侍を止めさした上、また別に工夫も御坐いますから」

「それほどの凄い度胸があつても、戀は別だに見えるね、お梅さん、打ち明けたところ全く其人に惚れ込んだのだね、は、は、は、首尾よく遣れば猶更、もし出来損つても囁りついて放さねエたア驚いたよ、しかし本人の色男様は、まだ其氣にはなるめエ」

「なるどころですか、親孝行で兄おもひといふ評判を取つてくるんですが、こ、半歳か一年の間には、きつと妾が其氣にして見せますから、なアに貴方、木でなし石でなしさ、心の動く人間ですもの」

「や、出来た、出来た、その勢ぢやア出来た、これが毛脛の太の男が力業なら覺束ねエが、その芳紀で其うつくしい顔で、その度胸と手腕を振舞はされちやア堪らねエ」

よ、は、は、は、は、は、

百年の苦樂は男に倚る女の多きか、百年の苦樂は女に倚る男の多きか、花もの言はざれど人を迷はすか、人もの言へど花に迷ふか、戀は慾に伴ふか、慾は戀に伴ふか、浮世は夢の如く夢ならざる間に事の順逆を宿して善といひ悪といふ、その善惡さへ思へば露の生命の西東、いづこに向うて誰にか問はん誰にか問はん、

毒

婦 後 編

其 一

親兄弟の行方を知らぬ顔して鼻唄うたふ奴はあれど、金と女の行方を其まゝには捨て得置かぬ世の淺ましき、縁も由縁もなき餘所の花さへ今を盛りの姿を隠せば、あつと驚いて我身の膽玉を取失うたるが如く血眼になつて立騒ぐ人心、ましてこれは江戸繁昌の隨一、その兩國に不斷の色香として萬人の思ひを惱ませ戀の源と唄はれし名物お梅が、一時に家も店も閉ぢて闇の夜の鐵砲玉、飛んで行きし方角さへ更に分らずなりしかば、朝夕うき身を襲せし色餓鬼の亡者共いづれも無念の眼を見張りながら、さて何處を睨んで宜いやらのめなき怨恨の空に、あはうと啼いて渡る鴉の聲、畜生め、ふざきやアがるな、

鐵も石も柔らぐといふ年は十八、おツとりとして騒がぬ中に滾る、愛敬を含み、びんとして強ねたところに案外の世辭を浮べて、しかも物數いはぬ自然の殺し文句、おのづから備はる男の生命取、小股きり、と切り上りて手足の指頭まで上反に薄紅の色づいたる風情、やア堪らぬとは全くの是沙汰、外へ持つて行かれぬ言葉の鏝、うツて叩いて動かぬ筈の名物、あれほどの女を、音もなく引抜いて突ツ走ツた奴そもくいかなる男ぞ、せめての腹癒せに唯一目その面を見て胸に下らぬ溜飲の青痰ひツかけてやりたいと騒けども、さてその男の氏も素性も名さへ影さへ知るものなければ、いよくあとの祭禮の轉手古舞、これまで上げし賽錢の鳥居の數々うらめしいとて、今は本尊なしの空宮に癩癩玉を叩きつけて口惜しがらぬ、

ふしぎや一夜に飛びし梅の花、いづこと思ひの外、おもひも寄らぬ平河町の天神横町

の主を慕うて色香を含むとは、ともに縁ある事ながら、縁なき萬人いたづらに戀を失うて怨める中にも、かの上汐の勘太は其後さらに一入の無念をかさねて親の仇敵、兄弟の仇敵、友達恩義の仇敵を見通すとも、ことし三十一の男も男、うてば響くと唄はれて江戸隨一の大川を我物とせる伊達男が、やうく十八の小女郎に追ひ使はれ追ひ廻されし果は嚙んで吐き出されし怨恨の返報、おのれあのみ、無事に置くべきや、しかも彼女のみか、しのぶ戀路の片相手、その青侍にも寢刃の一物、くれてやらすば平生の我この腕に申譯ないと覘ひ廻りぬ、

こゝにまた上州勝は善にも悪にも浮世の兩道かけて踏み抜いたる男、人知れぬ心のうちに思はず四十年來の笑を含んで、このごろの長き秋の夜なく、竊に寢覺勝の枕を欵てつ、煙草盆引寄せて天井に吹き上ぐる煙の行方に工夫を凝らし、しゆツと叩く灰



吹の音に思案を固めながら、今この太平の世に刃物三味は一人と一人、取れば取らるる生命の引替、よしや男を磨いて此上さらに百人二百人の子分を増せばとて、我ひとりの男ならねば四里四方の間に互に腕を争うて年中たえぬ日夜の繩張喧嘩、それさへ仕飽きて更に何の面白うもない折も折から、ほ、と笑うて二千石を笑渦の露に落さんとする花の顔、幸ひ子のなき我娘分にして内と外との裏表より疊みあけたる上、鬢に白髪は交るとも男一代、くわつと江戸の八百八町に鳴らしてくれん、よしや仕損じても浮世の年貢を借り過ぎて惜しからぬ生命、あれをあのまま、尋常の女にしても鬼勝の娘には恥づかしからぬ女、父子もろとも地獄の上の一足飛び、玉の輿に乗るか乗らぬか、江戸一番の男になるかならぬか、その幕開けの血祭りには幸ひ上汐の勘太め、こ、まで深い心の底は知らずとも、きけば伊勢屋の事より水茶屋を出せし樂屋の狂言人足となりし奴、第一が月見舟を待ち受けて抛けられながらも二千石の正體まで見届けたる

奴、まして自己が戀と慾との外れし怨恨は無念の白刃を磨いで覘ふとやら、どの道よりも我等がための厄病神、機會もあらば遁れぬ瀬戸際に追ひ詰めて蹴落した上、まづ此奴を事の手初めに引導わたしてくれんとぞ思ひぬ、

この隅田川の永代より吾妻橋の間を我物として、家根舟猪牙舟網舟一切の冥加錢を居ながら上汐の勘太といはる、男なれど、水には一盛りの夏も過ぎ月に名所の賑はひも過ぎて、いつしか筑波おろしの川風寒く、木枯の音さへ身に染む頃は懐中もまた秋の暮、内證の淋しきに連れて何か事あれかと思ふ例年の冬も、ことしは名物お梅を覘うて嫉妬の怨恨の一念に腸を燃しつゝ、幸ひ今より來春にかけて身は閑暇なり、おのれ此間に見付け出して寒中の手料理しめて叩いて熱燗の酒の下物にしてくれんと、腹心の子分五人を集めて柳橋の船宿小笹屋の一室に飲み始めぬ、

「さアいよく今日は十一月五日だ、川ッ尻の里蟹ぢやねエが、來年の二月まで水の縁を離れて冬籠りの穴這入りと來たぜ、霜枯三月たア局女郎の憂鬱文匂ぢやアねエ全く此方の御難時さ、しかし物の終局は元氣よく祝ッて置くが宜い、五人とも汐合に構はず錨を卸して、舟脚の腐るほど飲んでくれ、これが冥加錢の擲き仕舞だ、はは、は、は、は、は、は、」

「ことしの終局を元氣よく呑むからア、この五人の鼻ッ頭へ久しぶりの白粉氣、ぶんとしさうなもんだな、さのみ手数のかゝらねエこつた、萬事御近所だから」

「なるほど酌は美女その邊に如才もねエが、何だか此ごろ生ッ白い女の面を見ると癩に觸ッてならねエから、乃公の前ぢやア堪忍してくれ、その代り此家を切りあけた上、どこの女島へでも勝手に漕ぎ出すが宜い、舟と纜は乃公が確に受合ッたから、は、は、は、は、は、」

「女が癩に觸るといやアあの名物お梅、全體どこへ消えて仕舞やアがツたのか、其後さらに匂ひもしねエが不思議だ、しかし來年の春へかけて幸ひ用のねエ身體だから閑暇に明して江戸中を片ッ端から叩き出してやりてエな、ついでに相手の武士も此夏、月見舟で乙な事しやアがツた返禮だ、ことしの歳暮にやア何か胴骨に響くほどの一物、くれてやらざアなるめエよ」

「今更ら其尾に附いて未練らしう言ふでもねエが、男ア意氣地で世の中ア張合さ、第一あの水茶屋も上汐の勘太が後楯で出したといふこたア、この兩國界限で知らねエものもないと思つたら、猶更ら人一倍の力瘤を入れて名物お梅とまで唄はした曉に犬骨折ッて鷹の餌食、其ま、音もなく消えて無くなられちやア乃公の面が立たねエ、なるほど、最初は木でも石でもねエ料簡があつたにしろ、いやなら嫌で宜いさ、取ッて押へた野暮もいはねエに畜生め、ふざけた阿魔だ、世話になるだけなツた終局」

の果に一言の挨拶もせず、すきな野郎と手を取って此勘太に鼻を明すたア太エ女だ、これのみならば、まだしもだが、どうやら黒幕となつて狂言を教へた奴が氣に食はねエ、あの上州勝だ」

「何だ上州勝、あの鬼勝か、さう聞いちやア是が非でも金輪奈落の底だ、いよく癩癩が治まらねエ」

「さんざ世話をした結果、縁も由緒もねエ十八の小女郎に後足で砂をぶっかけられて、しかも其黒幕が四十面さけた上州勝といふんだ、いかな啞でも黙ッちやア居られぬエ、下手な佛師が作つた木像の手でも動き出すところだ、まして五體に生血の通つた上汐の勘太、この上は文句もねエ、生命の遺取だ」

「や、面白エ、さうでなくつても、あの鬼勝め、平生から男自慢に、立つの立たねエのと吐して、をりく自己が繩張外の河岸ツ端から川の中を覗きやアがる奴だ、機

會があつたら引き摺り下して、水雑炊でも食はしてエと思つて居たが、幸ひのこつた、なアに陸でこそ少しやア飛んだり跳ねたりする奴だが、ぐるくと簀巻にして流して仕舞やア忽ち往生、濡れた淺草紙一枚の壽命もねエ野郎さ、ぢやアまづ彼奴から片付けた後、ゆるくと阿魔を探し出して、はゝゝゝ、すぐ息の根を止めるも惜しいから思ふ存分に慰んだ上、あとの巢殻を叩き賣つて冬籠りの酒にでもしべエか」

「おい、上州勝の簀巻は宜いが、阿魔を探し出して慰んだ後を冬中の酒代にするたア、男らしくもねエこつた、止せ、たとひ花の色香にしる珠玉にもしろ、この勘太が敵と睨んだ以上は汚ららしい、いやなこつた」

「だって、あんまり惜しいぢやねエか、心ア墨でも面ア雪だ」

「はゝゝ、際どいところで浮氣を出す奴等だ、面ア雪でも心は墨と呆れ返つて嫌に

なるかと思ひの外、逆様に取ツて這ひ出すたア凄まじい、ぢやア兎も角、見付け出して乃公は乃公だけの腹癒をするから、その後は五人の勝手次第、骨折賃に呉れるとしようか」

「は、は、は、夏も小袖だ、火事場の跡の鐵糞でも吹き分けて見るといふ男に、あれほどの名物女、誰が御辭退申し上げるもんか、ところで五日や十日を寐るぐれエの腹癒は宜いが、あとの役に立たねエ大疵ぢやア困るから酷く痛めねエやうに頼むぜ、また折角この五人が骨を折ツて引捕へて来た上で、なるほど今更ら面を見ちやア手が出ねエなぞと捨てた煩惱を再發しても無効だ、仲間の念佛講にやア入れねエぜ」

「は、は、は、腐ツても勘太ア男だ、煮て喰はうが焼いて喰はうが見向もしねエその代り巢殻を叩き賣ツた酒は飲むぞよ」

「どうか酒だけで済ましてエもんだよ、ねエおい一人でも講中が殖えちやア互に氣乗

が薄くならアね」

「は、は、は、すきな熱を吹く奴等だ、萬事まア珠玉を擱ンでからにしろ、空手で文句を並べたツて晝に描いた盃だ、味も無きやア酔ひもしねエよ、しかし五人とも油斷はならねエぜ、阿魔が首ツたけ嚙りついてる青侍、ありやア尋常の二本差と違ツて随分おもひの外に小手の利く奴だから」

「小手が利いても向脛が働いても、寸隙を覘ツて打ち込む分にやア此方のもんだ、いかに跳ねても蹴ツても四本の手足を一本づつ荷いだ上に、まだ一人が残る筈の五人がかりだ、しかもこの夏の月見舟で睨んで置いた風體、大名の勤番者ぢやアなし藏前蟲の御家人ぢやアなし、大方、旗本の次男か三男と射抜いた金的、よもや外れめエから邸宅の見當も付いて居らア、それに續いて探りやア阿魔の居所も、まさか雲を掴むやうぢやア無からうさ、兎も角も此方は五人で引受けたから、あの鬼勝を」

「おツと皆までいふな、男と男の一疋取替、いつでも何處でも時と場所はねエ、出逢ふが最後、上州勝は勘太の手のうちだ」

六人もろとも車坐となつて酒酌み交しながら、始めは額を鳩め聲を響めて語りしが、いつしか酔うて圖に乗り勢ひに任せつゝ、果は四邊も憚らず自己が膝拍子を打つて罵り騒ぐ折しも、襖を隔て、彼方の一室より天井も墜ちんばかりの高笑ひ、

「はツ、はツ、は、、、、、飢饉年の亡者野郎め、たまの料理屋酒に喰ひ酔つて腹の蟲が狂つた故か、ろくでもねエ上ツ調子に人間並の聲を出しやアがる、うるせエうるせエ、耳觸りだ痛觸りだ、第一この下物に酸の氣が差して美味くねエ酒の味まで違つて来たア」

朝の鴉の啼聲、夜半の犬の遠吠さへ、敵手次第の無事では置かね六人、くわツと怒つて物をもいはす隔ての襖を蹴開けば、上州勝たゞ一人、大胡坐の左に胴金巻の脇差を

引付けながら、手酌の盃とりあけて動きもやらず、立ツたる六人の面體じろりと睨んで冷かなる笑もろとも眉も寄せぬ、

「やい、うぬ等ア全體、どこの温氣に連れて湧いて出た蟲だ、たとひ一時でも半時でも、この一室ア乃公といふ客が借り切つた城廓だぞよ、うろく／＼狼狽へて這ひ込んで見る、は、、、、、しかし萬一、それでも人間並と思ふなら、其中の勘太とやらいふ奴たゞ一人、こゝまで出る、男と男の一疋取替、いつでも何處でも出逢ふが最後と吐した今の一言、さアその相手の鬼勝だ上州勝だ、あとの五人の奴等ア箎でも持つて来て粉に散る骨の屑を拾つてやれ、但しまた、牛は牛づれ共倒れになる覺悟なら、遠慮はねエ、會釋も入らねエこつた、六人一度にかゝつて来い、誰の事かア知らねエが、手足四本に取つても一人は残る筈と吐したが六人ぢやア二人も残る筈だ、その鬮が敵味方の境目、乃公から出ようか、うぬら等から落ち込むか、

さア返答しろツ」

いひつゝ、持てる盃ぐつと飲み乾して片膝を立てながら、片手に脇差の鍔元を寛け待ち構へたる體、うまれついでの大兵に寸隙もなく、しかも今年四十二の曉まで幾人の血糊を浴びて腕に覚えの面魂、ぶつと吐いたる酒氣に一入の度胸を据ゑて物凄し、五人おもはず猛勢に吞まれて互に顔を見合す中より、流石は上汐の勘太たゞ一人、やツといはゞ其のまゝ起つべき用意の雙脛を隔ての鬨際に詰め寄せて、をりしも炎々と盛り上げたる眞鍮の大火鉢を手許に引寄せながら、

「むゝ勝か、噂をすれば影とやら、いつの間に這入り込んで居たか知らねエが、ふわふわと人魂のやうに音もなく出たり隠れたりするにやア妙を得た奴だ、なるほど、あの小女郎が一夜のうちに消えて無くなつた手際も讀めた、ところで今この五人を敵手に談し合つた一伍一什、嘘アねエ全くのこつたから、よく臍腑に叩き込んで覺

悟しろ、うぬと乃公とが一勝負で、あの女郎と相手の武士を引受けたのだが此の五人だ、はゝゝゝ、始めて逢つた時にやア眼前の留女と承知で並べた二の足、今また此家の客商賣と知つての上の花喧嘩か、おけく、決闘なら立騒ぐ世間が夢で天道様も御存じのねエ闇の夜の野原ですることつた、をかしくもねエ人騒がせの空文句は、いや左様で御坐いの齒拔屋が聞いて呆れらア」

「はゝゝゝ、時と場所も構はず出逢ふが最後と吐いたら、幸ひ後ともいはず今こゝで襖一枚が生死の境目、さア来いと言つたのだが、高が料理屋の一軒や二軒、血に染めたつて、金ですむこつた、客商賣なら猶更ら何の迷惑があるもんか、しかし舟板の水垢を舐めて其日やうく送る分際ぢやアねエさ、ところで名物お梅の行方と忍ぶ戀路の片相手、うぬが間拔さ加減が鼻毛を抜かれながら、この鬼勝が何として何とやら見當外れの白痴推量、うける筈もなし聞く耳もねエが、知つた證據があるか

と問ふよりも、知らぬといやア知らぬ證據を出せと逆様の屁理窟を吐すも面倒だ、いッその事この鬼勝が承知で隠した黒幕になつてやるから、みごと探し出して思ふ存分にしろ、やい／＼、そこに竝んだ五人の南瓜野郎、今日から腰辨當で江戸中を探して歩け、よし探し出せねエでも足さへ達者にして置きやア損はねエ、喰ふに困つた時の三度飛脚になれるから、また勘太ア注文通りだ、草木も睡る真夜中ごろ何處でも勝手の場所を選んで案内しろ、うぬより胴骨の太エ奴を十三人も叩き斬つて來た一腰だ、は／＼／＼、十四人目にしちやア刀が不足を言つて夜鳴するかも知れねエわい」

「文句は文句、何と吐しても六人と一人、今こゝちやア面白くねエ、いづれ其うち五分々の勝負だ、また隠した女郎と相手の武士も」

「やい待て今まで隠した覚えはねエが、いひかゝつた言葉の張合で今日から改めて隠

すのだ、しかしこの鬼勝が隠した上は、は／＼／＼」

「四里四方の草を分けても引き摺り出すぞよ」

「出るか出ねエか後のこつた、前口上は儲置いて随分まア駄骨を折つて見ろ」

「は／＼／＼どこまで口の減らねエ奴だ、今に後悔するな」

「念には及ばねエ、こゝは互の腕づくだ、かくし手と探し手の睨み合ひ、といひてエが、まづ其前に汝が生命は無からうよ、落ちる地獄の釜の底でも探すが宜い」

「底といやア蓋を取られて驚くな、しツかり四方から釘を打つて叩いて用心しろ」

「まだ互に鏡を削る御縁が薄いといふもンか、さツと赤い一雨、いつも降るやうで降らねエ空の雲脚だ、これで二度目の相引か」

「佛の面も三度の諺だ、さツと降り出した曉は逃げ込む軒下も隙も無からうぜ、今から笠の臺の緒を占めて吹き飛ばされねエ覺悟しろ」

「まさか覺悟するほどの敵でもねエさ、は、は、しかし勘太、いつまで互に無事な面ア見合ッて文句ばかり竝べて居たッて埒が明かねエ、さらば一番、面倒なしに口を定めて」

「おツと望むところだ、十日か半月か一月か」

「いや、互の勝負は今が今でも附くにしる、事の原因となつた名物お梅、うぬが爲には無念の塊物だ、それを其ま、探し出す日數もねエ間に死ンぢやア氣の毒だ、いかな水功者でも浮ばれめエから、まづ五人の奴等が四里四方を駈け廻る間の日取、幸ひ來春まで身體の閑暇と吐した一言で今日から三月だ、來年の二月までを日限と定めろ、敵でも何でも情を叩いて踏み込む鬼勝ちやアねエ」

「なるほど、まだ五體の片隅に男氣の残つた言分が殊勝だ、ぢやア來年の二月までを互の運命、その間に女郎を探し出すか出さねエか、その曉に討つか討たる、か」

「お、よし、それでこそ其方に心が残るめエから、乃公に取ッても打ち込む鋒鈍に思ひ切ッて容赦がねエ、とかく男の張合に曇りがあッちやア互の名折れた、は、は、勘太、まア其間ア身を大切にしろ」

「うぬも随分、養生して、煩はねエやうにしるい、いはゞ雙方、あづかり物だ」

「む、こりやア、今日中の秀句だ、互に預り物の生命たア能く言ッた」

「よくも悪くも來春の三月まで、張り詰めた氷の解けるが相圖だ、鬼勝、い、か」  
「おツと、よし、たしかに承知だ」

## 其二

ろき世を忍ぶ身ならねど、江戸繁昌の隨一といふ兩國の水茶屋に朝夕の客を迎へつ、しかも不斷の色香に名物お梅と唄はれし萬人の戀を振り捨て、音もなく一夜のうち



に花の姿を隠せしかば、何とやら影に追はる、心地して安からぬのみか、中にも上汐の勘太が嫉妬と怨恨の一念を身に覚えある事まして戀は戀なれど此まゝいつまで日蔭の露を宿とする心ならねば、いづれにしても今のうち人に顔みられて親しう物いはるは身の爲ならずと深くも行末を思つて我から羽翼を縮めし籠の鳥、音さへ漏らさず餘所を憚れば、人知れず通ふ男の情いよく増して、いつしか魂魄を奪はれつゝ、生命ものかは、世にまたなき名花一輪、戸の隙間も風にも當てじと思ひ込みぬ、神社佛閣と物見遊山の差別なき人心、されば平河町の天神も朝夕たえまなき雑沓に包まれて、いつまでの隠れ家ならねど浮世の裏の細小路、壁一重の横町は却つて人の氣付かぬのみか、もの調ふる世帯の便宜もよし女ばかりの身の用心もよし、さては番町より忍ぶ情の通路にも遠からず、もとは社家の隠居が住みしといふ家を借り受けて、お梅母子の外には下女たゞ一人、幸ひ庭前の樹立ふかく廣ければ母屋に離れて茶室め

いたる六疊二室を新たに建てつゝ、をりく人知れぬ樹間を漏れ来る燈火の影は、これぞかの大林小三郎が忍び來て、戀の手枕に夢結ぶ春の塙なりける、

木枯しの音たかく蕈の霜を吹き拂うて、空には牙え渡る師走の月いと物凄く、まだ夜は更けねど流石に人の通ひ路も絶え果てつゝ、門守る犬の遠吠さへ聲を含み、ながす按摩の笛も凍りて身に染み渡るころ、天神横町のお梅が門の戸を引き開けて、ぬつと出でたる大男そのまゝ立去る影を、此方より透し見ながら軒傳ひに入れ違つて、今しも閉てし戸を軽く叩けば、かの大男また振り返りて歩を停め、じろりと見詰むる體家内には母親の聲として、

「何か、お忘れ物で御坐いますの」  
「いや今、出た人と違つて要助だ」

「あれ、お梅や、要助さんが」

聲もろともお梅は戸口に來りて迎へ入れながら、

「おや要助さん、今ごろ貴方、お一人」

「何、お伴して來たんだがね、ちよいと天神様へ御參詣の間に先觸だ、しかし今、ここから出たア全體、誰だね」

「あれで御坐いますか、あれはね、私の伯父で、久しく逢ひませんでしたが、勝藏と申しますもの」

「む、さうか、そりやア兎も角お迎ひに出るから」

いひつゝ、取ツて返して走せ出づれば、今の太男いつしか去りて影もなく、主の小三郎たゞ一人、わざと目立たぬ風體に面を頭巾もて深く包めど、空照る月に大小の鑄きらきらと光りぬ、

要助が戶外へ走せ出づるや否、さらに心の寸隙もなき名物お梅、片手に鬘を搔き上げながら、そのまゝ門口に立出でて迎ふれば、小三郎おもはず頭巾の中より微笑を漏らしぬ、

「む、梅、迎ひに出たか、わけて今夜は寒いので、要助、もう歸ツて宜いぞ」

いひつゝ、年久しく召使ふ我家來ながら、人知れず忍ぶ戀路と思へばこそ、懷中より紙に捲りし小粒の露を渡しぬ、

「これで暖まつて歸れ、明朝は迎ひには及ばん、しかし例の通り、脱殻の部屋の番を頼むぞ、はゝゝゝ」

「恐れ入ります、ぢやアお梅さん、此ごろ少々お風を召して在らッしやるから、あまり御酒を差上げないやう、萬事お願ひ申しますよ」

「はい、御苦勞さま」

母親は母屋の裏口まで送りて、下女は臺所の片隅より差覗くのみ、お梅は奥の庭傳ひに手を取りて戀の唄に伴ひつゝ、誰に習はねど自然に備はる男殺しの本性、兩國の花といはれて朝夕萬人の客を手鞠に取りし不思議の愛敬を、今は唯一人の男に集めながら、氣も心も溶けて流るゝばかりに行届いたる色香の振舞、これが今年やうく十八、しかも此ごろまでの處女かと思へば、うまれついたる天生の魔力、元來の生命取、さても怖ろし物凄し、

「今夜は、わけてお寒う御坐いますに、よくまア」

「雪も氷も熱くなつて通ふ身の空といふ事があるから、はゝゝゝ、霜ぐらるは何でもない、みちくく白く冴えた月に照り渡る屋根の薄化粧を見ても、梅、早く其方の顔が見たいと思つてな、我知らず、はゝゝゝ、足の運びが浮いて小石に躓く體、見せてやりたい、見てほしい」

「あれまア」

「いや嘘でない、五人十人の武藝者が一時に斬り込んでも更に驚かない男が、戀に追はれて思はず石に躓き、よろゝと倒れかゝつて軒下の天水桶に組み付かうと致したところ、我ながら不覺千萬、面目次第もない見苦しさ、伴に連れた要助の手前も恥づかしかつたぞ、しかし大林小三郎ともいはるゝ、武士を誰が斯様にした、何者の仕業か梅、返答せんか、はゝゝゝ」

「ほゝゝゝ、何と、御挨拶を申し上げまして宜しいやら」

「申譯があるまい、あつて宜いものか、戀は古今の曲者、いかな勇士も叶はんといふ事を今始めて我身に知つた、が梅、其方の目から見ると男といふものは、さてく痴けた者と思ふだらうな、はゝゝゝ」

「あれ、勿體ない事を、縁なればこそ、わけて不思議の御縁あればこそ、妾風情が斯

やうに、それもお邸宅へ御奉公申し上げて、お末の端でも勤めまする身ならば格別あのやうな賤しい水茶屋家業を致しました女が、俄に世間知らずの安樂な御手當を戴いて、このごろの寒い風にも當らず、かやうに居ながらお忍びを待ちましては、却ッて物の冥加が怖ろしいかと存じます」

「む、其方は、かうして居るより、邸宅へ來たいといふのかな、とかく武家邸宅は窮屈千萬だぞ」

「かやうに下種に育ちました不束な女、お邸宅へ上りましたところで、何の御用に壹つ筈は御坐いませんが、たゞ行末を長く、お傍で御奉公申し上げたいばかり、ものには萬事それぐの釣合似寄といふ事を、かねぐ承りますに就けて猶更、今でこそ、かやうに母子二人が、お情の端に縫ッて居りましても、いづれ其うちには冥加の盡きる時節も、また如何やうな事で人の嫉妬も、つまりは餘り身分の相違が

不縁の原因で、辛い悲しい、お別れを致しますかと、それが今から」

いきくと澄み渡ッて張り詰めたる黒目勝の臉を細めて、露か雫か燈火に顔を反けながら差俯けば、わざとならぬ前髪の端ばらりと額にかゝりて、雪を欺く襟首に水際立ちし毛筋の美はしさ、音もなく漏らす溜息、つくぐと我身の末を思ひ煩うたる風情、あはれ古今名筆の畫も及ぶまじと、今更に見惚れたる小三郎おもはず膝を進めながら、手はかけねど抱き寄せて其脊を撫でんばかりの情に迫りつ、

「何をいふかと思へば、たはいもない取越苦勞、は、は、は、安心して居れ、たとひ誰が何と申しても、いかなる仔細アッて何者が遮らうとも、梅、侍に二言はない、其方は生涯捨てぬぞ、しかし現在その身の安樂を儲置いて窮窟千萬な武家奉公まで致しても、この小三郎に未長く附き添うて居たいとは殊勝な心掛、なほさら以て人の嫉妬や身分の相違その餘の他人業如きで、は、は、は、そもぐ其方には、その美貌

ばかりで思ひを懸けたのではない、しかと見届けた事があつての上、また縁あればこそ、かく深うなつた今更、氣心も知らないかのやうに何を馬鹿な、はッはッはッはッ

「いろくくと、身に餘つた思召を伺ふほど猶更」

「え、其方にも似合はん愚痴な事を、まだ分らぬか」

「いえ、そのみでは御坐いません、實は、妾の身に就きましても」

「む、其外に、まだ何か心配でもあると申すのかな」

「今までのやうに、母子たゞ二人で其日々の賤しい家業を致して居りますれば、さのみ却つて難儀とも存じませんが、かやうに一方ならぬ御恩を蒙りながら、もしや萬々一、妾風情の事から御見分柄に觸るやうな、恐れ多い事でもと」

「む、餘の事は押置き、身分柄に觸るとは」

「何を馬鹿な、また取越苦勞と、お叱り遊ばすかは存じませんが、あの兩國に水茶屋を出して居ります時分、家業が家業で御坐いますから朝夕、うるさく大勢の客が入りましたして、ほ、ほ、ほ、妾のやうな女を、いろくくと、その中に一人、わけて執念深く附纏ひますものが」

「こりや待、それが其方の不戀か、き、たくないぞ梅」

「あれ、よくお聞き遊ばさないで、憎らしい事を、戀も色も妾には生れてから死ぬまで唯お人の外、いえく存じません、いくら何と御意遊ばしても、其方の御名前、は暫く申し上げられませんか、ほ、ほ、ほ、ところで執念深く附き纏ひました其男が、世間普通、たゞの男でもあれば、また謝絶の仕様も身の遁れやうも御坐いますし、さのみ怖れて逃げ隠れ致さすとも濟みませうが、何分あの隅田川で永代か吾妻橋までの間を我物顔に上汐の勘太と申して、家形舟猪牙舟網舟なぞ一切の冥

加錢を一人で取上げますほどの奴、いつぞや五十兩のお金を戴いて返しましたも其  
 中で、また今年の夏、月見舟のお伴を致しました節、川岸に待ち受けて、あのやう  
 な無禮を働きましたも其男、そもく水茶屋を始めて出す時に、根は戀と慾との  
 兩道からで御坐いますが、聊か世話になりましたを恩にかけて、はや妾ども母子を  
 手に入れたやうな顔面、それはく朝夕に追ひ廻されて、身を切られるほど嫌な事  
 ばかり、一時は人の氣付かぬ遠い田舎へ影を隠さうかとまで」  
 「なるほど 其方の美貌で繁華の土地の客商賣を致して居ったなら、いづれ大勢の  
 者どもが、そのまゝ捨て、置く筈もないにせよ、さてく其奴けしからん奴だな、  
 しかし今、かうして居れば別に怖るゝ事も、うるさい事も無いでないか」  
 「たとひ世間聞れての御恩を蒙りませすとも、これまでとは違うて、人に指でもさ、  
 せる梅では御坐いませんが、何分に只今も申し上げました通りの奴で、實は、おの

れが身勝手の戀の仇と慾の的外れから、其上また今年の夏の事も無念に存じて、竊  
 に寢刃を磨いで取りませす様子」  
 「はゝゝ、盲目は蛇に怖ぢずといふが、なるほど呆れた奴だ、しかし此家を存じて  
 居るかな、まゝ大林小三郎といふ事を知つて居る様子かな」  
 「いえくまだ此家も、御身分も、お名前も、さらに存じて居らないやうで御坐いま  
 すが、おのの子分とやらを、毎日々々四方八方へ出して隅から隅まで江戸中を探  
 し歩いて居るとの事」  
 「む、其事誰が申したな、其方また何者から聞いた」  
 「はい、それは妾の伯父、伯父と申しまして今まで逢うた事もなし、うすく只そ  
 の名ばかり聞いて居りました、實は母方の義理ある弟で勝藏と申します者、もとは  
 上州安中に生れましたが、只今では兩國から淺草見付をかけて日本橋界限までを

町人の身で恐れ多い事で御坐いますが、俗に自分の繩張内と稱へまして、男が立つの立ぬのと其日々々々を伊達に暮しますもの、上州勝、また敵に向うて二の足を踏まぬ鬼のと仇名を取りますもの、ふと水茶屋へまゐりまして、ふしぎな事から互に名乗り合いました間もなく、かやうに御恩を蒙つて家も店も一時に仕舞ひましたところ、そつ伯父がまた上汐の勘太とは年來の意氣地で、申さば同じ土地で水の上の男と陸の上の男が睨み合うて居りますとの事、まして此ごろは妾の事を聞いて猶更ら互の張合が強くなりました様子、實は今夜も其の伯父が、そつと、まゐりましてあの要助さんと入れ違ひに」

「む、先刻、要助と入れ違ひに出たといへば、ちらと月影に見た男、なみくより別けて脊の高い男であつたが、あれか、道理で不思議さうに立止つて先方からも見て居つたが、互に近寄つて摺れ違つた時、無言で丁寧に會釋して通つたが」

「それ、それが伯父で御坐います、委しうは申しませんが、かねぐお噂を承つて居ります折柄、お出會ひ申した場所といひ御風俗といひ、さてはと存じて、會釋いたしたので御坐いませう」

「や、それなら逢うて談話をするであつたに、惜しい事を致した」

「いづれ、まゝ其うち、お目通りを致させますが、今夜まるつて、伯父の申しますには、この夏の御手際を承つた以上、決して心配はしないが、さて敵手が敵手で、おのれが思ひ詰めた戀と慾の間違ひから下種根性の一徹、どんな事をするかも知れない奴だ、また此方の御身分が御身分で、まさか白晝に相對喧嘩の出来る方でも無し、もこ萬々一お名前にでも觸るやうな事があつては、御恩を受けて居る汝が濟むまいから、今のうち願つて、お邸宅の方へ兎も角お末奉公といふ名でも上るか、それとも暫時、嫌でもあらうが、お暇を戴いて、どツか片田舎へ身を隠すか、いづれ

にしても第一汝が事の原因だから、つまり自分に罪が無くツても、物の成行に得てある習慣だ、御恩を仇でお返し申すやうな事にならないやう、こゝは何とか能く考へて、汝の姿を彼奴等の目の届かないところへ隠すが宜からう、その代り後は乃公が引受けて、この事の餘炎が冷めた時分、世間の人に聞かれても宜い男づくの喧嘩を仕掛けし彼奴を片付けるから安心せい、全體あの勘太め、たゞさへ捨て、置けぬ奴だが時と時とて、こんな事のある折柄、男を磨く家業で妙な風聞が立ツては面白くないばかりか、もし乃公が一料簡で仕掛けた事を、陰で汝の方から糸を引いて居るやうに聞ては、これもまた、やはり筋を傳うて御身分に觸ることツたからと、かやうに申して歸りましたが」

「むゝ、その上沙の勘太といふもの、いよく以て怪しからん奴だ、恥辱も義理も辨へぬ下種根性の習慣で、世間に往々ある事、おのれが戀と慾の間違ひから却ツて執

念ぶかく仇に取といふならば、まだしも、それがため、身の分際も顧みず寢刃を磨いで武士を覘とは小癩千萬な奴、覘はるゝまでもなく、ひッ捕へて打斬るも易いが、さて其方伯父がいふ通り、身分柄、まさか白晝に相對喧嘩も出来まい、いやはや、思ひ寄せらぬ困ツた奴に出逢うたぞ」

「それも皆、もとは賤しい家業を致しました妾の身から、今更ら何と申し上げて宜いやら、なるほど伯父の申す通り、こゝは妾さへ自分の不運と諦めて悲しい目を致しますれば濟むこと、暫時お暇を戴きまして田舎へでも」

「はゝゝ、誰が何と申しても、いかなる者が遮ツても、其方を捨てぬといふは、この事、まして今きく如き奴が、どれほどの妨害を致さうとも、梅、怖るゝ事はないぞ、名と身分を思へばこそ進んで手は出さぬが、もし萬一の事あらば更に容赦はない、無禮討だ、なるほど其方が屋敷へ來たいと申したのも、これがためか」



「は、實は、さやうで御坐います、あのやうな奴に追ひ詰められて、折角かうなツた自分の戀を割かれた上、悲しい田舎へまるるよりは、たとひ人目の關にせかれながら、朝夕お顔の見える御奉公がしたいと存じまして」

「は、しかし梅、それは兎も角、いつまで其方を此ま、此家に置く氣では無いぞ、もし屋敷へ呼ぶならば、男と違ひ女は氏なくとも假親、假家など、申しての、強ち奉公にせずとも、また呼ぶやうに致して迎へる工夫もあるから、まづ暫く時節を待つ宜からう、かねて申し聞かした通り、父は現在まだ役儀を勤めて隠居の身分でな、兄は今のところ別に知行を戴いて御城に勤めては居るが、いづれ父の死後は兄が世を取るべき筈、さすれば次男は分家か他へ養子にまるるか、こゝが身の定まる時、まづそれまでは梅、このまゝ、氣樂に致して居れ、其方がある以上、たとひ國司大から貰ひに来てても養子は飽くまで禁物、もし父も兄も分家不承知と

あれば、は、は、二人で世を安く浪人住居が結句、面白からう、しかし斯やうな時に母でもあれば、そつと餘所ながら其方を見せて、また何とか今のうちに仕様もあるが、さて幼少に別れて物堅い父と嚴格な兄の手前、打ち明けて言ひ出したところが却つて、えいッ、成行次第だ、互の氣さへ變らずば梅」

「それほどまでに、この妾を、承れば承るにつけて猶更、行末の御出世にも觸りますやうな争ばかり、え、もう、いッそ、最初から御目にかゝらなければ、何故あ

の時、軒並べた水茶屋が十二軒も御坐いますに、妾の店へ」

「は、は、は、また始まつたぞ、十二軒あるに致せ、其方が店と知つて飛び込んだ譯でもない、あれが縁といふもの」

「その御縁が今更、恨めしう存じます、あの時に御縁さへ無くば」

「縁さへ無くば却つて、宜かつたと申すのか」

「ほ、ほ、ほ、善いか悪いか、妾には分りませんから、上汐の勘太に聞いて見て御返事を致しませう」

「や、此だめ」

「あれ、お曲が火鉢の中へ」

「は、は、は、焼かれるとは全く此こと、あは、は、は、は、は、は、」

## 其三

すはや一年中の油断大敵め、今この時に押寄せたりと、あはれ質草の種も盡きたる空大名、わつと俄に狼狽へて立騒げば、寄手は得たりと其機を外さず、追手搦手より一時に関の聲を作つて矢の催促寸隙もなく目玉と算盤珠の總勘定を放ちつゝ、大晦日の峠を切所として互に討ちつ討たれつ戦ひし浮世の大騒動、叶はじと妻子の手を引いて

落ち行くもあり、馬武具を失うて赤裸武者となりながら踏み止まるもあり、そのまゝ、親重代の城を仇として無念の討死するもあり、さてはまた餘所の矢叫びを聞きつゝ、春まつ心長閑に年を送るもあり、ことし一年の寶を數へて肥えし身代を喜ぶ家もあり、けに人間の世樂さまざま、吉凶いろいろ、泣くも笑ふも只この時と凄じかりし世の中も一夜あくれば新玉といふ和睦の聲に敵味方うちとけて、天下泰平こゝに祝ひ壽く正月の三日、下戸さへ屠蘇と呼び換へ平生の無沙汰も互に出逢うて笑語きつゝ、白晝は巷閨を馳せさせ往來ふ禮者の物音に絶え間なけれど、夜は一入さらに常よりも淋しく、まして江戸名物の筑波おろしか武藏野風か、八百八町の蓑を吹いて音高く、空には星影ものまぐ闇の縫ひ目に漏れて通ふ人氣もなし、されど身に浮世の煩累もなく戀に心も勇みて妹が行けば冬の夜の肌寒からぬ大林小三郎だ一人、例の要助をも召連れず星明りを使りに無提灯のまゝ、麴町の方より平

河町の天神門前まで来かゝる折しも、一人の大男また彼方より来りて、をりく背後を振り返りつゝ、人や追ひ来るかと思ひ見る體、何をか思ひけん小三郎そのまゝ、軒下に身を倚せし窺へば、かの男いよく見返り勝に歩みしが、果は俄に立停まりて憤怒を含める聲、中音なれど太く冴えて闇に響き渡りぬ、

「やい、うぬア何だ、この寒中に音もねエ徒跣で人の後を見え隠れて蹶けて来る奴、大昨日に生き残つた半亡者が一夜あけて湧いて出た物貰ひか、但しやア間盜か追剥か面ア見せろ」

いひつゝ、身を捻つて足踏み鳴らせば、四五間ほつと彼方の闇に紛れて五體は見えねど胸の一物おつづから現はれぬ、

「晝でも夜でも天下の往來だ、先に立たうが後から行かうが勝手次第の市中を何のこつた、をりく振り返つて氣にする奴こそ間盜か追剥か面ア見せろ」

「は、は、は、いよくお里を現はしやアがツた無宿野郎め、賣言葉に買言葉ア互に面を見合つた時の文句だ、闇の中で賣も買もあるもんか、身に缺點がなきやア黙つて通りぬけろ、もし用でもありやア名乗つて来い、乃公ア江戸の男數に肩を並べた上州勝といふもんだ、わるく動きやアがると爲にならねエぞ」

「上州勝か野州勝か知らねエが、この脛ッほしは親ゆづりだ、他人の指圖で進退はならねエ、黙つて通りぬけるも抜けけねエも餘計な世話だ」

「は、ア讀めた、この鬼勝が今夜どこへ行くか、その穴を探つて来いといはれた上沙の飛沫野郎だな、は、は、は、さア附いて来い、まだ三四里もあるところだ、ほのほのと夜の引明際に面ア見た上で朝酒の一盃も飲ましてやるから」

いひつゝ、更に油断せず、胴金卷の腰の勝差揃り直して、わざと其まゝ、天神横町を打過ぎつゝ、およそ一町あまりも行きしと思ふころ、きやつと叫びし闇中の一聲、驚いて

振り返るや否、星明りに透して見れば、別に一人の男が手を持てる一刀きらりと光りて我を呼び止めぬ、

「これく上州勝とか申す人、こ、構はず引ッ返して、行く家へ行かれたが宜からう、あとより一人、すぐまた行く者が、は、は、は、」

上州勝さてはと思つて二歩三歩そのまゝ、近づきながら、星明りに中腰となつて會釋しつゝ、

「たつた一聲の往生、お手際のほど恐れ入ります、這ひ寄つて御刀の血でも拭きます筈で御座いますが、まだ御意も得ません拙者、わざと此まゝ、御免下せエまし、ぢやア一足お先へ、いづれ後刻あらためて」

一夜あけての春とは名のみ、冬の夜の身に染む戀も寒さも人知れぬ浮世の忍びどころ、

例の離れ座敷に大林小三郎と上州勝と只二人、わざとお梅は座を避けて我身の事を聞かじと母屋の方へ行きぬ、

なるほど當時旗本生育の若様風、まして忍ぶ戀路に通ふ二十四の部屋住といへば、宵聞の薄の穂にも驚くべき初心の優男に聞ゆれど、じろりと物を見る眼中に凄みを帯びて、筆端の跳ねたる如き眉尻、かたく一文字に結びたる唇端、厚鬢の大髻を惜しけもなく引絞りて、肉は肥えざれど流石に鍛えたる五體の骨節おのづから寸隙もなく、をりをり漏らす片頬の笑渦に愛着の露は含めど、きつと身を定めて思はず立直す額際には八幡きかぬ氣の一徹を現はして何者も許さぬ血氣の體、これぞ世にいふ殿様鐵火、いかに自然の縁とはいひながら選りも選んだり流石お梅の戀男、まことに似たもの夫婦ぞと今更に驚けば、小三郎もまた上州勝を見て、高が蒼間の春風に鳴る奴風、立つの立たぬと何の男がと思ひの外、ちらく鬢に霜降る心の秋に分別ありけの面魂、し